
仮面ライダー響鬼×タユタマ 戦鬼と太転依

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー響鬼×タユタマ 戦鬼と太転依

【Nコード】

N7146X

【作者名】

ゼロディアス

【あらすじ】

泉戸家に居候している男性「ヒビキ」、彼は泉戸裕理を弟子にして「鬼」として戦い続けていたが、ある日「太転依」と呼ばれる者達が目覚め、怪物「魔化魍」だけでは無く、太転依とも戦う日々が始まった……。『注意・7人の戦鬼の設定などを使っていたり、「猛」が無かったりしており、独自設定などがあります。そういうのが苦手な人は回れ右を』

一之巻 『響く鬼』 (前書き)

やっちゃったなあ。

因みに衣服は消滅しません。

いきなりヒビキが気になる発言します。

このヒビキは一応、オリキャラです。

一之巻 『響く鬼』

ある森の中、太古の左右を叩く歌舞伎のような鬼と青黒い鬼が太古を叩いていた。

『ドンドンドン！ ドドドンドン！！』

「あゝ、もうダメダメ『歌舞鬼^{かぶぎ}』。もうちょい腰に力入れないとさ」

青黒い鬼が歌舞鬼と呼ばれた鬼に言うと、歌舞鬼は「こうですか？」と腰に力を入れてみる。

「どうでしょうか響鬼さん？」

「おお、まあ、いいんじゃない？」

「なんですかその曖昧な返しは……」

「そんなん気にしないで続きと行くよ！」

響鬼と呼ばれた鬼と歌舞鬼は再び太鼓を叩き始めた。

＊

数分後、響鬼は金髪青年の姿「ヒビキ」となっており、歌舞鬼に変身していた男性は茶髪の鈍感そうな顔をしている「カブキ」とい

う高校生であり、本名は「泉戸^{みと} 裕理^{ゆうり}」、鬼となった者は「鬼」と名前が入ったコードネームのようなものを貰うが裕理はまだ学生な為鬼の関係者以外からは本名で呼ばれている。

「さて、ここまでの修行は終わりだね」

「はい、ヒビキさん！」

「じゃあここから家までダッシュュ！！」

元気よく走り出すヒビキにカブキは「ええ！？」と言いながらも仕方なくヒビキの後を追う様に走って行く。

「ほらほら、早くしないと置いて行くぞ少年！ シュツ！」

ヒビキは右手を廻して指をピツとする仕草をしながら走る。

「ちょ、少年って呼ぶのやめてくださいよヒビキさん！」

＊

その後、カブキは友人の「河合^{かわい}アメリ」という青い髪の年代の少女とチャライ感じがする留年して2人より少し年上の男性の「要^{かなめ}三九郎^{さんくろう}」が来ており、カブキはアメリの頼みでバイクを修理していた。

「だからユウ、早くこの私のバイクを直しなさい！」

「バイクって、こんな1万円しかせんポンコツ……」

「そう、お得でしょ？」

そんな会話をアメリカと三九郎はしており、カブキは苦笑いしながらも作業をしていた。

「ついでに僕のバイクもいいかな？」 最近調子悪そうだね

アハハ……と笑いながら自分のバイクをカブキの元まで持ってくるヒビキ。

「ちょ、ヒビキさんは自分で出来るでしょ!？」

「いや、バイクなら少年の方がバイク見るの上手いと思ってさ」

「ヒビキさんおはよう」

ヒビキは手を廻して「シュッ!」と言った後「おはよう」と答える。

「まあ、そんな訳で、ヒビキさんのもあたしのも出来るよねユウ？」

「ん、どうかな? アメリカのはパーツを殆ど変えないと……」

「じゃあそうして」

「簡単に言うなよ……」

苦笑いしながらも結局カブキはどちらも修理することに。

とそこへカブキの父親である「泉戸 裕導」みと ゆうどうが入って来る。

「よう、今日も若いのがウチで溜まってるなあ」

「あ、ユーディ」

「おはようございますおやっさん」

裕導に挨拶する三九郎とアメリ。

「おう」

「どうしたですかおやっさん？」

ヒビキが裕導に尋ねてみる。

「なーに、実は息子たちの通ってる学校での工事で少し問題がな。
それを息子に頼めぬかと思って……。 あ、どうせならヒビキも
一緒に行ってくれんか？」

ヒビキとカブキは首を傾げながらも夕方。

カブキの通っている女子学部と男女共同学部が1つの巨大な学園で
ある「創聖学院」の中にある工事現場にやってきたヒビキとカブキ。

「少年、これ結構ヤバいんじゃない？ 僕は鬼だから感じるけどさ」
「ですよ……ね」

工事現場には奇妙な文字が書かれた遺跡があった。

「これあれだろ、なんかが封印されてる感じの。 この気配に惹か
れて『魔化魍』まかもろうが現れないか心配だなあ」

「そんなにヤバいですか？」

カブキが冷や汗流しながらヒビキは「うん」と頷く。

「まあ、封印が解けてたら大丈夫だったかもね多分。 魔化魍はこ

これから発生してるエネルギーの影響受けてパワーアップする可能性がある」

その時だ……。

「その2人！！　ここでなにしてる！」

突然怒鳴り声が聞こえ、2人が振り返るとそこには女子学部「フロールレス」の制服を着た少女「如月^{きさらぎ} 美冬^{みふゆ}」がこちらを睨んで立っていた。

「えっと、なんでグラント拡張工事が無くなったのか気になっちゃって（フロールレスの執行部員か）」

「だからといって勝手に中に入る奴がいるか！　それにそっちは生徒でも無いだろ！」

ヒビキはサムズアップして……。

「気にするな！」

「気にするわ！！！」

「俺はこの人と関係無いから、じゃっ！」

高くジャンプして森の中へと入って逃げて行くヒビキ。

「鍛えてます」

それだけ言い残して。

（ああ、他人のフリをすれば俺に迷惑かからないから……）
「なんなんだあいつ……」

＊

森の中へと入ったヒビキは赤いタカのようなものが彼の肩に突然乗って来る。

「アカネタカ、御苦労さま。 やっぱりこの気配に惹かれて魔化魍が来たかぁ」

その時だ、背後の草むらが『ガサッ』と音を立ててアカネタカがそこへ飛んで行くと1人の女性が姿を現した。

『ぐうゝ』

しかし女性の声は男性のような声をしている。

「なるほど、『姫』か。 やっぱり嗅ぎつけたな」

『鬼か』

背後から声を聞こえ、振り返るとそこには女性の声をした男性がいた。

『鬼だ』

「ああ、お前達の嫌いなね……」

ヒビキは「変身音叉・音角」と呼ばれるアイテムを取り出し、木に軽くぶつける。

すると「キーン」とう音が鳴り響き、音角を額に当てる。

「はあああああ……」

青い炎に包まれるヒビキ。

「ハアア!!」

そしてその炎をぬぐう様に腕で炎を振り払う様な動作をするとヒビキは「鬼」の姿、「仮面ライダー響鬼」へと変身した。

「さあて、行きますか」

姫と呼ばれた女性と男性「童子」は怪物の姿へと変化し、口から蜘蛛の糸らしき粘着液を響鬼に吐きだすが響鬼は粘着液を全て避ける。

姫と童子は飛び上がって木から木に飛び移って響鬼を翻弄する。

『『鬼さんこちら』』

「おちよくってるのかお前等！」

少し童子と姫にイラツとしながら響鬼も木から木へと飛び移って姫と童子を追う。

「てりゃあ！」

響鬼が童子に追いつき、飛び蹴りを喰らわせる。

『んぐっ！？』

木から落ちる童子だが、童子はなんとか着地。

だが木から飛び降りた響鬼のパンチを喰らい殴り飛ばされる童子。

童子にかけ出す響鬼だが、背後から姫が突然現れて響鬼を抑えつける。

『今だ』

姫に領いた童子は、腕の蜘蛛の足のような武器で響鬼を斬りつける。

「うわあ！？ そらあ！」

響鬼はなんとか姫から離れ、姫の腕を掴んで童子の方まで投げ飛ばした。

『『ぬお……！？』』

響鬼は倒れこんでいる童子と姫にゆっくり近づく。

姫は一足先に響鬼から逃げだし、童子も逃げだそうとする。

「逃がすか！」

響鬼は口を開き、青い炎「鬼火」を童子に放ち、童子は耐えきれず吹き飛ばされる。

『うおおお!!?』

しかし童子はそれでも響鬼に仕返しと言わんばかりに殴りかかる。

「こいつ、逃げようとしてなかったっけ!?!」

響鬼は童子の拳を掴んで童子の顔面を殴った後、蹴り飛ばした後、再び鬼火を童子に放って童子の身体は燃えてゆき塵となって爆発した。

『ぐわああ!!?』

「本命がまだいるよな、ディスクアニマル達に頼むか」

響鬼は変身を解き、人の姿へと戻る。

「ホント、どうにかしないとな」

頭をポリポリかいた後、ヒビキはカブキの元に走って行った。

一之巻 『響く鬼』（後書き）

裕理のことはカブキと表記して準主役にして性格に少しオリジナル要素を。

猛がないのはリ・イマジでも無かったし……。

裕理が原作で使う力は歌舞鬼になると使用不能に……。

次回予告。

ヒビキ

「これカブキの神社で祭ってる感じの？」

ましろ

「よし、それじゃ大人しく生きてけ！」

カブキ

「見ててください、俺の……変身！」

次回『歌舞く鬼』

ニ之卷 『歌舞く鬼』 (前書き)

台詞にオリジナルが多い。

綺久羅美の後の「守」と「売」の間の漢字がどうやって出てくるのか調べてもダメだったので名前は綺久羅美のみで。

ED 「少年よ」

二之巻 『歌舞く鬼』

あれからヒビキとカブキは一旦家へと戻り、夜になるとアメリカと三九郎に協力を頼んであの遺跡をどうにかする為ヒビキ達は再びあの場所へ向かった。

「それにしてもヒビキさん、あの後誤魔化すの大変だったんですよ？」

「やー、悪い悪い」

苦笑いしながら謝罪するヒビキにため息をつきながらもあの遺跡の場所に行くヒビキ達。

「おやっさんにはやらさへんのか？」

「親父は飲み会、それに……」

カブキの言う先が分かったアメリカ。

「ああ、それにユーディじゃ適当だもんねえ」

笑いながら頼りにされていない裕造であった、因みにそれは本人も認めている感じがある。

「俺、鬼だけどあんなに霊の形が見えるのは異常だからね」

「ちょっとヒビキさんやめてよ、霊とか！！」

ヒビキの発言にビビるアメリカ。

「神社の息子と鬼に言うことか？」

とアメリカにツツコム三九郎。

カブキは神社などで男性が着ている衣装に着替える。

「中々似合っとするやん」

「それじゃ、始めるよ」

お祓いを始めるカブキ。

お祓いをしている最中、カブキは来年の、将来のことを考えていた。

神社を継ぎながらも鬼の使命を背負って戦うのか……それとも……。

その時、風が……「時間」が止まった。

「風が止んだ？」

「違う、時間が止まってる」

ヒビキのその発言に驚くアメリカと三九郎。

そして遺跡の巨大な木から銀髪の女性が姿を現した。

「な……なんや!？」

「太魂依……様？」

カブキが恐る恐る尋ねるとカブキの言う通り妖怪のような存在である太魂依らしく、女性の名は「綺久羅美」。

「カブキ、これってお前の神社で祭ってる感じの……」

「はい、あの、綺久羅美様！」

工事があるからどうにかならないかと綺久羅美に相談しようとするカブキ。

『大丈夫です、全て分かっています』

「どうにかなりませんか！？ 工事が進まなくてダディ達も困ってるんです！」

前には言わなかったがアメリの父親はこの学園の理事長であり、裕造と今飲みに行っている。

『申し訳がないのですが、この木を倒される訳にはいかないのです。破壊することはありません。もしこの木が倒されればここに眠っている何億もの太魂依達は世に解き放たれて混乱を招くでしょう』
「分かりました、俺達の出来る範囲のことで工事はやめて貰う様にやってみます！ 理事長にも話をして……」

カブキがそう言うのと綺久羅美はお礼を述べる。

『何時の日か、太魂依と人間が共存出来る日がくるといいですね』

ヒビキ達に微笑む綺久羅美。

「きっと出来ますよ、『太魂依でもない』者達と共存出来たこの世界なら」

ヒビキの言葉に綺久羅美は頷き、消えようとした時……。

『はん！ なにが共存だ！！』

『まだそんな寝言を言っておるのか綺久羅美!!』
『『グエー!!』』

突然不気味な声が鳴り響き、黒いオーラが遺跡からあふれ出る。

「おい裕理、ヒビキさん、これヤバいんちゃうか？」

「アメリカちゃん連れて逃げろ、三九郎！」

カブキに言われてアメリカはバイクでここから離れようとするがなぜか進まなかった。

実はアメリカや三九郎には見えていないが小型の太魂依らしき者達がバイクを止めていたのだ。

『最近騒がしくてすっかり目が覚めちゃった』
『応龍、ですがすぐにまた眠って貰います!』
『はん、500年振りのこの機会を逃がす訳ねえだろ、なあ、お譲ちゃん!!』

突然アメリカの前に黒い龍の顔らしきものが現れ、それに驚いたアメリカはエンジンをかけたままバイクから驚いた際降りてしまい、そのバイクは遺跡へと激突。

「ああ!？」

ヒビが入り、遺跡が割れてしまった。

『なんということを……!!』

「マズイな、魔化魍達もそろそろ狙ってくる頃だろうし……」

遺跡からさらに大量の黒いオーラが溢れだす。

「綺久羅美様!!」

『これがここから動けなかった理由、古の盟約により、ヤチマタの後継者であるあなたにこの子を託します。　お願いします、未来を……』

綺久羅美は苦しそうにカブキにそう頼んだ後、遺跡が輝きを放って強い衝撃が起こった。

『うわぁー!!!?』

そして気が付くと、カブキの前に……。

狐の耳と尻尾、白い着物に銀髪のハンマーを持った少女がいた。

「は？」

「ひ？」

「ふ？」

「へ？　誰!？」

「みんな……おしおき!　まてー!!」

それだけ言うと小型の太魂依達を追いかけだす少女。

ハンマーを振るいながら太魂依達にお仕置きをしている。

「和みますなあ、やっぱり子供は元気が1番だな」

どこからかちゃぶ台とお茶を取りだしてズズッと飲んでるヒビキ、他の3人は啞然としていた。

「以外に強いで」

「ていうかなんでヒビキさんはそんな和んでんの!？」

「どっからちゃぶ台出したんですかヒビキさん!？」

当然アメリカとカブキのツツコミが飛んでくる訳で。

「!」

その時、なにかに気付いたヒビキ。

「どら、ちょっとおふぎ……遊んでないで仕事と行きますか」

「それ言いなおした意味あるんか？」

カブキは思う、なぜこんな人が自分の師匠なのだろうと……。

ヒビキは音角を取り出し、自分の指で音角を鳴らし額に当てると青紫の炎に包まれ、炎を薙ぎ払う様に右手を振るう。

「はああ……ハア!！」

仮面ライダー響鬼へと変身したヒビキ。

「なんで変身を？」

「分かんない？　じゃあまだまだ修行が足りないなあ、少年!」

響鬼は少女の元へと駆けだす。

「者ども、ちゅうもーく!　私のこの白い髪、目にはいらぬかあー!」

小型の太魂依達を自分に注目させる少女。

『綺久羅美様〜!』

「わたしの目の黒い内、人を襲うのぜったいぜったいゆるさな―い
!! わかったら解散! ぜんいんおとなしく生きてけ!」
『は〜い!!!』

小型の太魂依達は去っていく。

その時だ、背後から姫が現れ少女に襲い掛かる。

「あらよつと!」

だが響鬼が現れて姫を蹴り飛ばした。

「ぐっ!?!」

「よう少女ちゃん怪我ないか?」

「鬼……?」

可愛らしく首を傾げる少女。

「ああ、ちよつとお兄さんがあいつらやつつけてくるから!」

響鬼は姫を追い掛けて森の中へ入って行く。

＊

木から木へと飛び移る姫。

「暗いからって同じ手が通用すると思うな！」

響鬼も木から木へと飛び移り、すぐに姫を捕まえ地面へと叩き落とす。

『鬼め』

「あの女の子の力を奪おうとしたのか？ そんなの僕がさせない」

姫は響鬼に殴りかかるが響鬼は受け流し姫の背中に蹴りを喰らわせる。

「そりゃ！」

『ぐうう！？』

蜘蛛の足のような腕の武器で響鬼に攻撃を繰り返し、響鬼は太古に使う棒のような「音撃棒・烈火」を取り出して姫と響鬼、2人は同時に互いに攻撃を炸裂させた。

『「ぐわあ！？」』

その際どちらも吹き飛ぶが姫は響鬼から逃げるように去っていく。

「くそ、また逃がした！」

響鬼はカブキ達の元へと戻って行く。

その頃姫は……蜘蛛の魔化魍「ツチグモ」の元に戻ったが姫はツチグモに食べられてしまった。

＊

響鬼が戻った頃には太魂依の中でも上位クラスの「3強」と呼ばれる「応龍」「鵜」「鳳凰」が空に漂っており、ハッキリした確認できないが巨大であることに変わりはない。

『500年前の恨み、はらさせて貰うぞ!!』

応龍と思われる影が少女に襲い掛かるが少女はバリアらしきものを張って防ぐ。

「させない……もう1回ふういんする……!!」

『フハハハ、やれるもんならなあ!!』

「くっ……」

だが防ぎきれずに少女は吹き飛び遺跡に激突して気を失った。

『弱すぎる、今のお前を殺しても詰まんねえ!! 今度はガチで遊んでやるよお!!』

3強はどこかへ去って行き、カブキ達は少女に駆け寄る。

「大丈夫!?!」

カブキが少女を抱える、だがその時、まだ抜けきっていない為か綺久羅美の力に惹かれてツチグモが森の中から飛び出した。

「ツチグモ……！」

「ひい！ 気持ち悪い……！」

響鬼は音撃棒を構える。

「行くぞお！」

響鬼はツチグモに駆けだす。

（鬼の力があるのに……、俺は……啞然として……。違う、本当は怖かったのかも、でも！）

カブキは音角に似た黒い変身音叉を取りだし、地面に叩いて音を鳴らす。

「でも今度は俺が守るから、みんなを（その為に、鬼になったんだから）」

「ユウ？」

額に音叉を当て、炎に包まれ炎を振り払う様に右腕を振るうと歌舞伎を思わせる赤と緑の鬼、「仮面ライダー歌舞鬼」へと変身した。

「はあああ……ハアア……！」

「これが、裕理の鬼……！」

「始めてみた」

アメリと三九郎はカブキの変身は初見であり、歌舞鬼は響鬼の元に

走って行く。

音撃棒でツチグモの足での攻撃を受け流した響鬼、そこへ高くジャンプして飛び蹴りを喰らわせる歌舞鬼。

『グエエ!』

「来たか、少年」

「はい!! 鳴刀 音叉剣!!」

音叉を刀へと変化させ、響鬼と肩を並べる歌舞鬼。

「行くぞ少年」

歌舞鬼は無言で頷いた後、歌舞鬼と響鬼はツチグモに向かって走って行く。

ツチグモは足を使い響鬼と歌舞鬼を退けようとするが響鬼は音撃棒、歌舞鬼は音叉剣でなんとか受け流し、ツチグモの腹部に接近した歌舞鬼が腹部を斬りつける。

「そこだ!!」

『ギエエエ!!?』

「はあああ、そりゃあ!!」

音撃棒から炎の玉をツチグモに放つ響鬼。

『ギシャー!?!』

「歌舞鬼、僕の背中を踏み台にしてツチグモの背中に乗れ!」
「えっ? あ、そうか!」

歌舞鬼は烈火と同じ形の武器「音撃棒・烈翠」を取りだし響鬼の肩を踏み台に高くジャンプし、ツチグモの背中に乗るとすぐに腰の中央に装着されている丸い「音撃鼓」を張りつけるとそれが巨大化し、太鼓のようになる。

「音撃打・豪華絢爛!!」

烈翠で音撃鼓を歌舞鬼が叩く度、魔化魍には「清めの音」が流し込まれ、ツチグモは苦しむ。

「振り落とされるな歌舞鬼!!」

「うう……はい!」

暴れるツチグモからなんとか振り落とされまいと清めの音を流しこむ歌舞鬼、そして耐えきれなくなったツチグモは爆発して飛び散った。

『ギシャアー!!!!?』

「あいだッ!？」

歌舞鬼はツチグモが消滅した際に地面へと転んでしまい、響鬼が手を差し出す。

「よくやったな少年」

「だから、少年っていうのやめてくださいって」

響鬼の手を掴んで歌舞鬼は立ち上がり、変身を解除。

ヒビキはアメリカ達の方を見ると右手を廻し何時ものアレをやる。

「鍛えてますから、シュツ！」

二之巻 『歌舞く鬼』（後書き）

まろまろ可愛いよまろまろ。

次回予告

ヒビキ

「犯罪だぞ、少年……」

ましろ

「これやくそく！」

カブキ

「じゃあ、ましろってどうかな？」

次回『住まう太魂依』

三之巻 『住まう太魂依』（前書き）

イブキもオリキャラ……。

因みにこの作品は他作品とリンクしていたり、次回でどれか分かる
と思いますが。

三之巻 『住まう太魂依』

あれから家に帰ったヒビキ達は少女を寝かし、様子を見ていた。

「ほう、封印されていた太魂依がなあ」

「ホンマ偉いこっちゃで」

上から順に裕導と三九郎が喋る。

カブキは眠っている少女を見ており、ヒビキもカブキも含めて少女の様子を伺っていた。

「まあ、こんな少女を連れ込んだからには信じるしかあるまい。

しかし家で祭っている綺久羅美様が家にくるとは……」

「正確には違いますよおやっさん」

「どう違うのヒビキさん？」

アメリカがヒビキに尋ねる。

「あの子は綺久羅美様の化身みたいなものだよ」

「子供ってこと？」

「うーん、少し違うけどまあそんな感じかな？」

腕を組んでアメリカにそう説明するヒビキ。

カブキが少女は落ちついたらしいのでそこから立つカブキ。

「兎に角、アメリカも三九郎も有難う。親が心配してるだろうから早く帰った方がいいよ」

笑いかけながらアメリに言うカブキ。

「でも私はユウが心配、なにかあったら、連絡してね？」

アメリが心配そうに不安な表情でカブキに言うとかブキは「有難う」とお礼を述べる。

「アメリちゃん、心配無いって、俺達鍛えてますから♪」

ヒビキがサムズアップをするとアメリはどこか安心した顔をして三九郎と一緒に泉戸家を出て行った。

「所でヒビキよ、確か綺久羅美様の力を狙って魔化魍が現れたと言っていたが？」

「大丈夫ですよやっさん、それはあの遺跡から放出される綺久羅美様の力を嗅ぎつけて奴等が来た訳ですから、この子からそれは放出していない。少なくとも魔化魍が感じる気配は発してません」

ヒビキの説明を聞き、魔化魍がこの少女を狙う可能性が無いことに安心するカブキ。

「よかった」

数時間後、既に深夜になっており裕導は眠っており、ヒビキもソファに座っている。

「あ、目が覚めた？」

少女が目を覚ました。

「おなか、空いた……」

「アメリカが作ったおのぎりがあるよ？」

という訳でおにぎり……ではなくマシユマロを食べる少女。

「ご飯よりお菓子の方が好きなのか」

「うん、あまくておいしいー！」

にこにこ笑顔でマシユマロが気に入った少女。

「なあ、ホントに病院に行かなくていいのか？」

「病院でどうにかなるんだろうか少年？」

「うっ……」

ヒビキに痛い所を突かれた。

「だいじょーぶ、身体ちゃんとできてないのに無理しすぎた、休んだらなおる」

「そう？」

少女は自分を心配するカブキを見る。

「ありがとう、やちまた」

その事に対してお礼を言う少女。

「ねえ、俺の名前は泉戸裕理っていうんだ。鬼としての名前はカブキ」

「ゆーり？ ゆーりちゃん？ いい名前」

「ハハ、有難う、小さな綺久羅美様」

「綺久羅美」という名前を出されて少しシュンとなる少女。

少女曰く、自分の今の名前は「綺久羅美」という名前ではないらしいのだ。

「他に名前がないのかあ、じゃあ少年つけてあげたら？」

「そうですね、じゃあ……」

カブキは少女が持っているマシユマロを見る。

「まし……ろ、ましろとかどうかな？」

「へっ？」

「ダメ、かな？」

「ううん、ましろ可愛い！ 気に入った！ まーしーろーまーしーろー♪」

何時の間にか来ていた小型の太魂依達も『まーしーろーまーしーろー♪』と騒いでいた。

（どっから来たんだこいつ等？ あと、どーでもいいけどおにぎりを食べていたらましろの名前は『にぎり』という名前に……）

どうでもいいことを考えるヒビキ。

害をなしている訳ではないのでヒビキは放っておくことに。

「ゆーりしゃん女の扱い慣れてる。 普通の人ならもっとへた」

「はあ？ 何処を基準に……」

「ゆーりしゃん、奥さんとはうまくいってるのお？」

ましろのその発言に目を見開くヒビキとカブキ。

「はあ！？ 奥さんなんている訳ないだろ！？ 俺はまだ高校生だし！」

「500年前はゆーりしゃんくらいの人みんなお嫁いた」

500年前ならね……。

「僕は嫁ならいます、結婚してないけど」

何故かキリツとした表情で言うヒビキ。

「ヒビキさんには聞いてません」

「orz」

「ゆーりしゃんくらいの人もうみんな大人！ お嫁さんいないのよくない！」

よくないと言われても……と返事を返すカブキ。

「じゃあ恋人は！？ 愛人は！？ アメリってひとは！？」

「ちょ、アメリはただの幼馴染だって！！」

それを聞いたましろは頬を少し染め……。

「じゃ、じゃあ……あ、あのね／＼／＼ましろがゆーりしゃんのお嫁さんになる！／／／」

「はい！？」

「名前くれた人ゆーりしゃん、大事にしてくれる人ゆーりしゃん、

ましろゆーりちゃんが好き！」

ずいっと顔を近づけるましろをなんとか離すカブキ、ヒビキは口元を押さえてなんか笑っている。

「ちよっちょ、その話はましろがもう少し大きくなってからしようね！」

「ホント!？」

「う、うん」

「じゃあ契りする、いい？」

ましろの問いにカブキが頷く。

「ちよっとじつとしといてね？」

するとましろはカブキの唇に自分の唇を押しあてた。

「んんっ!？」

「んっ……／＼／＼」

唇を離すとましろは頬を染めている。

「これ契り、約束。ましろは人といきるために生まれてきたの、これやくそ……く」

ましろは寝に落ち、眠ってしまった。

(こんなに小さいのに……)

ヒビキの方を見るとなぜか冷やかな目でこちらを見ていた。

「犯罪だぞ、少年」

「いやこれは……ッ！」

「冗談冗談！」

アハハと笑いながらヒビキも今日は眠ることに……。

＊

翌日、カブキがましろを起こしに戸を開けると……。

「んっ〜！」

全裸のカブキと同年代くらいの美少女がいました。

（はっ？）

「へっ？」

美少女はこちらに気付き振り向く。

「あの、どちら様？」

「いやぁ！／＼／＼裕理さんどこ見てるんですかぁ！？／＼／＼／」
「なんで俺の名前を！？」

とそこへアメリカがやってくる。

「なにになに？　どうした……なにやってんのよユウウウウウ！！！！」

カブキの胸倉を掴むアメリカ。

「お、落ちついてくださいアメリカさん！」

「落ちついて……ってえ？　なんで私の名前……」

取り合えず美少女にブラウスを着せて美少女はなんとましろ本人だと言うのだ。

「裕理さんの手厚い看病のおかげでここまで回復しました、本当に有難うございます」

ついでにヒビキもここにおり、事情を聞いている。

「それにしても、ましろちゃん……」

「はい？」

「その格好はエロいよ」

ヒビキの発言にずっとこけるカブキとアメリカ。

「そんなことより裕理さん、ふつつかな妻ですがどうぞよろしくお願いします」

お辞儀をするましろ。

「ちょっと、妻ってどうゆうことよー！？」

「いや俺にもよく分からなくて……」

カブキの言葉にムツとした表情を浮かべるましろ。

「裕理さん、昨日交わした契りのことをもうお忘れですか!？」

「契りってなによ!？」

その後、カブキに寄り添ったましろのせいでさらにあやふやになったがヒビキがなんとか2人を落ちつかせ裕導にも事情を話し、取り合えずまず着る服を用意することに。

ましろはピンク色の着物を着て、それが裕導から死んだカブキの母のものだと聞くとましろは涙を浮かべまたお辞儀する。

「この着物を着ることに重みを感じ……、裕理さん、お義父様、ましろは誠心誠意泉戸家に全てを捧げます」

「いやいやいや!」

「ちょ、ちょっと!」

慌てるカブキとアメリだが裕導とヒビキは笑っている。

「ハハハ、流石ワシの息子!」

「ハハハ、流石おやっさんの息子!」

「親父、ヒビキさんまで……」

顔を上げるましろ。

「来るべき3強との戦いの為に裕理さん、これから準備を始めます」
「えっ?」

真顔になるましろ。

「やちまたの末裔のあなたに、未来を託します」

＊

その頃、ある湖の近くに2人のカップルが来ていたのだが、そのカップルはツチグモの所にいたのとは別の姫と童子が現れ、足を伸ばしてカップルを捕えようとするが、突然現れたバイクの男に足をバイクで千切られる童子。

『ッ！？』

「早く逃げろ！」

カップルにそう言った後、カップルは「は、はい！」と答えた後逃げて行く。

バイクから降りる男性はヘルメットを取る。

その男性の基本は青い髪だが銀髪の部分所々あり、「ぬら孫」のリクオにも若干似ており、ホイッスル型の笛「変身鬼笛・音笛」を取りだし、その角を立てて音笛を吹く。

『ピューイー!』

風が巻き起こり、男性「イブキ」の身体を包みこむ。

「はあああ……ハアア!!」

風をチョップで切裂くと胸には金色のアーマールしきもの、青い線の入った鬼「仮面ライダー威吹鬼」に変身を完了させた。

「来い」

右手でクイクイと姫と童子を挑発する威吹鬼。

姫と童子は足を伸ばして威吹鬼を攻撃するが威吹鬼は蹴り技で姫と童子の攻撃を全て弾く。

トランペット型の銃型の武器「音撃管・烈風」を取りだし引き金を引くことで圧縮空気弾3点バーストを姫に放つ。

『うう!?!』

童子が威吹鬼に向かって行くが威吹鬼はジャンプして童子の背後に回り込み背中を蹴りつける。

姫はなんとか足を伸ばして威吹鬼を攻撃するが威吹鬼はキックで弾きさらに烈風で姫を撃ちつけ、耐えきれなくなった姫は爆発を起こした。

威吹鬼は童子に烈風の銃口を向ける。

『ぐっ……』

だがその時、湖からエイとツバメを合わせたような魔化魍「イッタンモメン」が現れて威吹鬼を吹き飛ばし、童子はその隙に威吹鬼から逃げて行った。

イッタンモメンもすぐに空中を飛んで威吹鬼から逃げだす。

「まっ……！ 逃げられたか」

変身を解く威吹鬼。

「ニビイロヘビに探して貰うか、この中なのは確かだろうし」

イブキその場を離れる為歩き始めた。

三之巻 『住まう太魂依』（後書き）

次回予告。

カブキ

「今度食べに行こうか？ ここのレストラン」

ましろ

「あら？」

ヒビキ

「はっ？ 監禁！？」

イブキ

「おひさヒビキ」

次回『囚われの少女』

四之巻 『荒れる湖』（前書き）

タイトル変更、次回こそは……。

今回でどの作品とリンクしてるか分かりますよ、ヒビキの正体もな
んとなく。

四之巻 『荒れる湖』

あれから翌日、ましろはカブキの部屋に入りカブキを起こしに来ていた。

「おっきなさ〜い！！ 何時だと思ってるんですか！？」

まだ朝の6時なのにましろはカブキも叩き起こしに来たのだが、部屋にカブキはいなかった。

「あら？」

ましろは裕造にカブキも居場所を尋ねることに。

「ああ、きつとヒビキと一緒に鬼の修行じゃろ、場所を教えるから行ってみなさい」

その場所を教えられたましろは神社の森の中に入って行くとそこでは腕立て伏せをしているヒビキとカブキの姿が。

「はい、終了〜」

どうやらヒビキの合図からして丁度腕立て伏せは終了したようである。

「アレ？ ましろ、どうしたの？」

タオルで汗を拭きながらましろの存在に気付くカブキ。

「2人こそ、なにを？」

首を傾げるましろにヒビキが答える。

「修行だよ、鬼の。僕もカブキも鬼だからね」

「そう、ですか。でも裕理さんは鬼の修行もそうですが太魂依と戦う為の修行もやって貰いますよ？」

笑顔で言うましろにカブキは「はっ？」となった。

＊

「な、何周走らせるんだよお!!?」

カブキはもう神社の周りを何十週も走っていた。

「やちまた末裔たる裕理さんの霊能を引き出すんです」

にこにこ笑顔で言うましろ、ヒビキは近くで見ているだけ。

だが疲労が溜まりすぎてとうとうカブキは倒れてしまう。

「ほ、本当に俺にそんな力あるの!？」

「あります!」

「なぜ断言出来るんだ!？」

するとましろは「ふふん」と誇った顔をし……。

「あるからこそ綺久羅美は姿を現したのです、自分を信じてください……。はい後100周!!」

「ちょ、ヒビキさんもなんとか言ってくださいよ!」

ヒビキに助けを求めるカブキだが……。

「頑張れ少年! シュツ!」

応援するだけでカブキは「ヒビキさ〜ん」と嘆いていた。

そして小型の太魂依達が『走れ〜』と炎をカブキに吐く。

「おわあああ!!!?」

「そんな軟弱な婿を貰った覚えはありませんよ〜?」

「俺だってこんな鬼嫁貰った覚えはないよ!」

カブキの「鬼嫁」発言でましろの髪が白くなり紫のオーラを放つ。

「なんですってえ〜!!!?」

「ひえええええ!!!?」

ヒビキは微笑みながらその光景を見ていたが、突然自分の携帯が鳴って電話にでるとイブキからだった。

『あ、ヒビキ?』

「あ、イブキ? おひさ〜」

『うん、ヒビキおひさ〜』

そんなやり取りは兎も角イブキは本題を出した後、ヒビキとイブキは会話が終わると電話を切る。

「少年、ましてちゃん、僕ちよつとイブキに手伝ってほしいって言われてるからちよつと出かけてくるね」

「あ、はい、行つてらっしゃいませヒビキさん」

「ギャアア!!!!」

その後、ヒビキはバイク「凱火」に乗り、イブキの元へと向かった。

＊

カブキはその後、疲労でベッドに倒れこんでいたが、ましてろがやってくる。カブキの上に馬乗りで乗る。

「えっ? ちょ……」

いきなりすることに戸惑うカブキだが、ましてろが両手をカブキの胸の辺りに当てると両手を光らせ、太魂依の使い力「神通力」をカブキの身体に流し込む。

「これで楽になると思います、どうですか?」

「えっ、ああ、気持ちいいよ……」

確かに楽そうな顔をカブキはしていた。

「すみません裕理さん、最初だからこそ手厳しく接してしまい……。これからは加減します」

「アハハ、是非そうして。 3強っていうのはそんなに強いのか？」

カブキの言葉にましろは険しい表情で頷く。

「以前の綺久羅美ならどうにかなりましたが……。今の私では……。」「だから俺が強くないといけない訳か。 鬼の力だけじゃ足りないってことだよな。 本当に俺にそんな力があるのか分からないけど、やれるとこまでやるよ。 鍛え足りなきゃ、鍛えるだけだ」

その言葉に感動したましろはカブキに抱きつく。

「裕理さん！」

「おわ／＼／＼／」

「私の旦那様／＼／＼／どうか、私を1人にしないで……。／＼／／」

しばらく沈黙するが、次の瞬間ましろが爆弾発言。

「なにをしてもいいんですよ裕理さん？／＼／／」

狐の耳をピコピコさせながらとんでもないことを言うましろ。

「／／／／／」

とそこへ……。

「ちょっとー！！ なにしてんのよー！？」

アメリカが入ってきた。

「アメリカ!？」

カブキとましろは離れ、アメリカはカブキを怒鳴る。

「チッ」

「「えっ?」」

今ましろ舌打ちした?と聞くとましろは笑って誤魔化する。

＊

その頃、あの湖の近くの山の中にテントをイブキが張っており、コーヒーを飲んでいた。

「イブキ、来たよ」

ヒビキがそこへやってくる。

「おう、ヒビキ、直接会うのもおひさし」

「おひさ、イブキ」

ヒビキもイブキからコーヒーを受け取り飲み始める。

「所でどうよカブキは？」

「うん、中々良い具合に育ってる」

2人は同時にコーヒーを飲んだ後、コーヒーの入ったカップを置く。

「そう言えばさ、ヒビキ、お前の将来の嫁さんと最近合っていないだろ？ 俺この前会ったけど寂しそうにしてたぞ？」

「『次会ったら槍で串刺しにする』とか言って無かった？」

青ざめるヒビキにイブキは苦笑いを溢す。

「いや、確かに言いそうだけど『張り倒してフルボッコにしてやる』って言ってた」

「アハハ……。そう言えば今『翠屋』で働いてるんだよね？」

ヒビキの言葉にイブキは頷く。

とその時、ヒビキの携帯がなり電話に出るとカブキからだった。

「カブキ？ どうしたの？ うん、うん、分かった。じゃあましろちゃんに頑張れって言っというてね」

電話を切るヒビキ。

「カブキ？ なんだった？」

「ほら、前に言ったましろちゃん知ってる？」

「ああ、太魂依っていうのだろ？ 鬼の中でも太魂依のことを知ってる人は結構いる方だよ。俺は詳しくないけど」

そして本題は裕造がカブキやアメリカが通ってる学園にましろが入るものということだった。

「カブキといたいただけだろ、ましろ」

「だよねー、なんでもおやっさんが理事長にキャバितてるの妻に教えるぞって言ったらしく……」

「脅迫じゃねえか！」

＊

翌日、学園にバイクの後ろにましろを乗せてカブキとましろは学園に向かっていた。

「綺麗……」

上を見上げると青空に桜が満開している。

「大丈夫？ もう少しスピード落とそうか？」
「平気です」

因みに今、ましろは神通力を使って他の人には見えなくなっている。

「この子はこれで全力ですか？」^{バイク}

「いや、分回しなら4、5倍は行くんじゃないかな？」

「5倍ですかあ！？ 恐るべし機械の馬」

「アハハ……」と苦笑いを浮かべるカブキ。

カブキの提案で街案内を兼ねて寄り道をすることに。

「あ、「ポレポレ」っていう喫茶」

まずある喫茶店を紹介し、次に行った場所は「レストランAGITΩ」と書かれたレストランだった。

「今度ここ食べに行こうか？ 美味しいしね」

「はい！」

とそこへ……。

「アレ？ カブキくん？ どうしたの？」

店の前を箒で掃いていた青年が出てくる。

「どうも翔一さん」

翔一と呼ばれた青年に頭を下げるカブキ。

（（アレ？）（））

翔一とましろは互いになにかを感じ、どうやら翔一はましろのことが見えているようだった。

「その子カブキくんの彼女お〜?」

笑顔でからかうように言う翔一、その翔一の発言に驚くカブキ。

「ましろが見えてるんですか!？」

「えっ? どういうこと?」

手短に事情を説明した後、他の場所にも行くことに。

「裕理さん、ここは?」

ましろが指差す場所は「天ノ川学園高校」と書かれており、カブキは「ここは高校だね」と説明した後になにか「宇宙キター!!」という大声が聞こえたとか。

次に「OREジャーナル」という建物の近くに行くと「さっさと行け!!」という怒鳴り声が聞こえそこからカメラを持った男性が飛び出て来た。

「いって〜!?!」

バイクを止めるカブキ。

「また編集長に怒られたんですか真司さん?」

真司と呼ばれた男性はカブキに気付くと「おう、カブキ」と笑いかける。

「いやあ、ちょっとね、アハハ……。あつ、俺急いでるからまた今度！」

真司は急いで何処かへと向って行った。

「今の方は？」

「城戸真司さん、ジャーナリストだね」

さらに次は「クスクシエ」という店に通りかかると、店の前では翔一と同じ様に箒をもって店の前で掃除している男女が。

「光さん、フェイトさん、おはようございます！」

カブキが2人に挨拶をする。

「あ、カブキ！ おはよう」

「おはようカブキ」

光とフェイトと呼ばれた2人もカブキに挨拶を返す。

「どう？ ヒビキは？」

光がカブキにそう尋ねる。

「ああ、今イブキさんと魔化魍退治に」

「たまには帰って来てって伝えておいてね？」

「はい、フェイトさん！」

＊

その頃、あの湖の傍にイブキとヒビキが来ていた。

「さあて、ニイロヘビ達がそろそろイッタンモメンを引きずり出してくれる頃だけど……」

鬼達をサポートする普段はディスクの形になっているが、使用する時は魔化魍を見つけたら鬼をサポートする「ディスクアニマル」の1体「ニイロヘビ」を複数イブキは湖に放っておりニイロヘビがそろそろイッタンモメンを引きずり出す頃だとイブキは予想。

実際に予想は当たっており、ニイロヘビ達はイッタンモメンに噛みついたりして湖から引きずり出した。

「おっ、出てきたなあ」

音角を取りだすヒビキと音笛を取り出すイブキ。

音を鳴らした後、2人は額に音角と音笛を当てるとヒビキは炎、イブキは風に身体を包まれる。

「はあああ……ハアア!!」

「はあああ……やああ!!」

腕で炎を払いのけてヒビキは「仮面ライダー響鬼」に、イブキはチョップで風を切裂き「仮面ライダー威吹鬼」に変身した。

烈風をイッタンモメンに向ける威吹鬼だが湖から童子が飛び出し威吹鬼に襲い掛かるが響鬼の飛び蹴りで童子は蹴り飛ばされる。

「こっちはお任せだ」

「頼む」

響鬼は烈火を持って童子に戦いを挑む。

威吹鬼は烈風でイッタンモメンを撃ちつけてゆくがイッタンモメンは威吹鬼に体当たりを仕掛ける。

「うおっと!」

だが威吹鬼は高くジャンプしてそれを避け、さらに実弾である「鬼石」をイッタンモメンに撃ちこむ。

「ギシャア!!」

バックル部に装着している「音撃鳴 鳴風」を烈風の先端に装備し、「音撃モード」にしてラッパのように口につけて吹く。

「音撃謝・疾風一閃!!」

『パッパ〜♪』

烈風から鳴る音にイッタンモメンに撃ちこんだ鬼石が共鳴し、体内から清めの音を流しこむ。

イッタンモメンは苦しむが威吹鬼に向かい真っ直ぐ襲いかかって来る、しかし、間に合わずイッタンモメンは寸前の所で体内の鬼石を通して流しこまれた清めの音で爆発を起こした。

「ギシャア！！！！？」

「おわっ！？」

一方、響鬼は童子の伸ばす足に捕まり絞めつけられる。

「ぐわあ！！？」

『少し絞らせて貰います』

「冗談じゃない……！！」

烈火を持っていた為、炎を先端に宿し、童子の足になんとかつけると熱さで童子は響鬼から離れる。

『ぐう！？』

しかし、童子は足を伸ばし響鬼を攻撃し、それを喰らい吹き飛ばす響鬼。

「おわっ！？」

追い打ちをかけようと再び足を伸ばして響鬼を捕えようとする童子だが、その前に烈火に宿らせた炎を響鬼は童子に放ち、今度は童子が吹き飛ばされた。

『ぐわああ!!!?!?』

「烈火剣!!!」

音撃棒の先端の鬼石に炎を収束させて炎の剣を作り出し、響鬼は烈火剣で童子を素早く切裂き、童子は水の様なものを身体から吹かせて爆発を起こす。

『うわあああ!!!?!?』

「ふう、手間取らせて」

その後、魔化魍退治をした為ヒビキとイブキは帰る準備をしていた。

「それでイブキはこれからどうする?」

「そうだな、しばらくはそっちにもいるかもしれない」

ヒビキは「そっか」と言った後、イブキと共に神社に戻るのだった。

四之巻 『荒れる湖』（後書き）

次回予告。

ましろ

「ああ、動くんですよこれ」

トドロキ

「監禁……ねっ」

ヒビキ

「みんなで救いだそうよ、ましろちゃんをさ」

次回『囚われの少女』

今度こそこのタイトルの筈。

五之巻 『囚われの少女』 (前書き)

挿入歌 「Time judgment all」

五之巻 『囚われの少女』

とある森の中の川で、蟹の魔化魍「バケガニ」とその童子と姫がおり、そこへ1人の鬼……「仮面ライダー轟鬼」が走ってツチグモ退治をする為姿を現した。

「せやああ!!!」

轟鬼はバケガニの背中に飛び乗るとギター型の武器「音撃弦・烈雷」を突き刺す。

腰に装着された弦、「音撃震・雷轟」を烈雷に取りつける。

「喰らえ!!!」

だがそこで怪人体となった童子と姫が轟鬼に飛びかかってバケガニから突き落とす。

「おわあ!?!」

『邪魔はさせません』

童子と姫は蟹の腕を使って轟鬼に攻撃を仕掛ける。

だが轟鬼は童子と姫の攻撃を受け流し、童子に電撃纏わせたパンチを轟鬼は炸裂、童子は爆発四散し、何時の間にか轟鬼は姿を消しており姫は慌てて周りを見回す。

「そりゃああ!!!」

振り返ると電撃を纏わせた飛び蹴りを、自分に放っている轟鬼の姿が。

キックを喰らい、姫は蹴り飛ばされて爆発する。

『ぬわああ!!?』

「次はテメーだ」

バケガニの上に再び乗る轟鬼、そして烈雷をギターを弾くような動作で清めの音をバケガニに流し込む。

「音撃斬!! 雷電撃震!!」

清めの音を流しこまれ、バケガニは暴れるが素早い手の動きで清めの音をどんどん流しこむ轟鬼、耐えきれなくなったバケガニは爆発し吹き飛ぶ。

「ギシャア!!!!?」

「ふう、終わった終わった」

変身を解除すると、ヒビキやイブキともそんなに年は変わらない青年の姿になる。

名を「トドロキ」。

「さて、久しぶりにヒビキ達の所でも帰ってみようか」

それだけ言うとトドロキは自分のバイクがある場所まで歩き始めた。

＊

数時間後、魔化魍を退治したトドロキは神社に辿り着くと家のチャイムを鳴らす。

すると戸が開く、出てきたのはヒビキとイブキだった。

「「……」」

「おお、久しぶり」

「トドロキイイイイイ！……！！」

なぜかトドロキの名を叫びながらヒビキはトドロキの両肩を掴む。

「ましろちゃんが、ましろちゃんがああああ！……！！」

「ちょ、ヒビキ落ち付け！！ イブキ、なにがあった！？」

イブキがため息を突きながら、トドロキに説明する。

「なんでも……ましろが監禁されたらしい」

「それなんてプレイ？」

「そういう意味じゃない、そう捕えられても仕方ないけど。 詳しいことはカブキに聞いてくれ」

という訳でヒビキ達は家に入り、カブキに事情を聞くことに。

「実はですね……」

カブキの説明によると、ましろが入学する為に受けた試験は全て100点をとり、女子寮の方であるフロールレスに入らないかと誘いを受けたのである。

ましろはカブキとヒビキとも相談してフロールレスに入ることを決意。

しかし、入学早々あの狐耳と尻尾を大勢の生徒達の前で見せてしまったらしく、しかも動かしてしまい、それが原因でましろは監禁。

仕方なくましろは太魂依のことを話したのだが、当然信じて貰うことが出来ず、自分の妄想の世界に入ってしまったている病人だという事になってしまい、監禁されてるのだ。

「監禁……ねっ」

「そりゃそうだろ」

上から順にトドロキとイブキが喋る。

「少年、今夜ましろちゃんを救いに行くんだろ？」

「はい、三九郎と一緒に」

ヒビキは「そっか」とだけ言うと、イブキとトドロキを見る。

「手伝ってもいいぜ？」

「俺も」

トドロキとイブキは承知し、今夜ましろ救出作戦を実行することになった。

＊

夜、フロールレスに入る為には色々手続きが大変であり、外側だと尚更難しいので忍び込む以外ましろを助け出す方法は無かった。

ヒビキ、イブキ、トドロキ、カブキ、三九郎はハシゴを使って壁を乗り越えて行こうと準備する。

「結局アメリ、こんかったなあ」

実はアメリにも手伝う様に言っていたカブキなのだが、アメリはカブキに太魂依と関わることをよく思っておらず、カブキを元の生活に戻し、ましろとは関わりたくないで欲しいとアメリはカブキに言ってきた為、少し喧嘩になってしまい「勝手にしろバカ！！ 自滅しちゃえ！！」と言われてアメリは去って行った。

「でも、巻き込まなくてよかったと思ってる」

「優しいのお」

そこで三九郎は真剣な顔になり、カブキにある事を問う。

「裕理、引き返すなら……今の内やで？」

これは彼なりにカブキを心配しているのだろう、そのことに嬉しく思ったカブキはそのことに感謝する。

「有難う、でも……一応ヒビキさんがついてくるけど、僕が行かないといけないとダメな気がするから」

その時だ……。

「アンタ達ってホントバカ？ そんなちんけなハシゴでここの壁を越えられると思ってるの？」

アメリの声が聞こえ振り返る。

「アメリ！！」

「あゝ、確かに無理だ」

イブキがハシゴを見上げると、かなり高いハシゴを使ってるのに、もう少しという所で届いていなかった。

「くっ、こんな時に壁上りが得意なサムズアップが癖のあの人がいてくれたら……！！」

ヒビキは壁に手を叩きつけ、人の笑顔の為に戦った超古代の戦士の人のことを言うヒビキ。

「はぁ、仕方ないわね。　　ダディからこっそり奪ってきたこれで……」

アメリカが取り出したのは、フローレスに入る為のカードキーだった。

「おお!!」

「私が出来るのはここまで、早く行つてきなさいよ?」

カブキはアメリカに礼を言った後、ヒビキと共にフローレスに侵入する。

「なんや、聞いた話では随分と嫌がってたらしいやんか。さては惚れた弱みとか?」

ニヤついた三九郎に、アメリカはパンチを三九郎に叩きこんだ。

「ぐぼお!!?」

腹を抑える三九郎を見てイブキとトドロキは「怖ッ!!」と心の中で叫んでた。

＊

校舎に入ったヒビキとカブキ。

「お兄ちゃん、ヒビキさん、こっちです」

とそこへ青い髪の少女、カブキを兄として慕っている「小鳥遊ゆみな」が2人に声をかける。

「昼間連絡を受けた時は驚きました……」

「ごめんねゆみなちゃん、時間が無いんだ。 ましろはどこ？」

「ましろお姉様はこちらです」

ゆみなはましろのいる部屋まで2人を案内する。

「この奥です、ゆみなは人が来ない様に見張っておきますので」

「有難う」

「行くぞ、少年」

ヒビキの言葉に「はい」と答えた後、ましろの部屋を探してすぐに発見。

「ましろ……！」

ドアノブに手をかけるが鍵かかっていて開かない。

「じゃあ壊すか？」

右手の拳を構えるヒビキ。

「いや、自体が悪化しそうなんでやめてください。 ましろ、この位神通力を使えば通り抜けられるだろ!？」

だがましろは……。

「帰ってください、裕理さん、ヒビキさん。扉を開けるつもりはありません」

拭いた顔のまま、そんなことを言い始めるましろ。

「やはり私は1人の方がいいんです」

「ひょっとして、助けにくるのが遅かったから怒ってる？」

しかし、ましろはそれは違うと答える。

「気付いたんです。そもそも綺久羅美の残した理想に問題が合ったんです」

「共存の……ことだよね？」

「太魂依さえいなければ今の世は以前と変わらなかった……」

ましろの言葉を黙って聞くカブキとヒビキ。

「裕理さんだって、穏やかな日々……いえ、魔化魍と戦ってるから穏やかではありませんが今より楽な日々が戻ってくる」

「なんだって？」

「私の様な化け物にも、付き纏われないですむんです」

自分自身を化け物呼ばわりしたましろに、ヒビキは少し苛立った。

そしてましろは言う、信じて貰おうとちょっとした神通力も使った。

それでも誰も信じてくれなかった。

「私はやはり1人でいるべきなんです。誰にも頼らず、それが例え、裕理さんやヒビキさんでも」

だがここでヒビキは言った……。

「諦めるな!!」

「えっ……?」

「そんなことで、夢を諦めてどうするんだ! 僕の知り合いが言っていたよ、夢は諦めなければ必ず叶うって」

それに続きカブキも……。

「そうだよ、ましろは僕を信じてくれたんだろ? だったら僕も同じだけましろを信じ返す!! 1人で悩み過ぎなんだよ。そんな暗いことばかり考えてちゃダメだ、俺からしたらましろは十分人なんだ!!」

ヒビキとカブキの言葉でどこか、心が安心して来るましろ。

「もう2度と、ましろを1人にしない。信じてくれ!!」

「ましろちゃん、少年を信じる、自分を信じる」

「ヒビキさん、裕……理さん……」

ましろは涙を流し、神通力を使って扉をすり抜けカブキに抱きつく。

「うわああん!!」

「そういえば壁通り抜けられるんだった」

その時、フロアレスのセキュリティが起動し、警報が鳴る。

「お兄ちゃん! フロアレスのセキュリティが起動しました! ゆみなが嘘とかで少しでも時間を稼ぐから早く!」

「有難う、ゆみなちゃん！」

「今度外で会ったらなんか奢るよ、シュツ！」

ヒビキ達は一刻も早くここから去ろうと走って行く。

＊

アメリと三九郎、イブキ、トドロキは寮の中側に入りっており、ヒビキ達を待っていた。

「まさか裕理達見つかったんか!？」

心配する三九郎だが、丁度ヒビキ達が戻ってきた。

「皆さん、ご迷惑おかけしてすいませんでした！」

謝るましろ。

「そんなことより、早く出るよ!!！」

カードキーで扉を開けようとするアメリだが、なぜか使用不能になっていた。

「アレ?　なんで!?!　さっきまで開いたのに!!！」

「アメリ、はよせんと」

「分かってるわよ!!」

だが、とうとう美冬とその他の生徒達に見つかってしまい囲まれる。

「泉戸裕理!! 今度は誘拐まがいかな?」

カブキを睨みつける美冬、その横にはゆみなもいた。

「義理の妹まで利用して……」

「違うってば!!」

みふゆはカブキに時間を稼げなかったことを謝罪し、美冬はましろに帰ってくる様に言うが……。

「むっ……」

ましろはカブキ達を庇う様に立つ。

「君はその男に騙されているんだ!! 頼む、私を信じてくれ」

「それは私の台詞です!! フローレスの皆さんは私の言ったことを信じてはくださらなかった!!」

強い目で、美冬に言い放つましろ。

「ならば信じよう、太魂依という対抗手段も見つける」

ましろに微笑みながら手を差し伸べる美冬。

「正し、今夜この騒動を引き起こした愚か者にはそれ相応の罰を与える」

「ッ！ あなたはなに1つ私の言う事を信じてないじゃないですか！！」

ましろはカブキに振り返る。

「裕理さん、流石に私もそろそろ我慢の限界……。少し、頑な皆さんを驚かせてさしあげたい、よろしいですか？」

カブキはため息をついた後……。

「いいよ、ましろの好きにすると良い」

「有難うございます」

ましろは髪を白くすると、なにかを唱え始め、地響きが鳴る。

「ひえええ！！！？ なんですかあ！！！？」

ゆみなはカブキに抱きつく。

「大丈夫だよ……」

そしてしばらくし、ましろの周りに複数の獣の……綺久羅美が続べる太魂依達が集った。

「綺久羅美を頂点とする、名を泉戸ましろと申します」

「こんな……バカな！！」

女子生徒達は慌てふためいており、美冬も混乱している。

「すみません、ましろさん。1匹魔化魍混じってます」

「へっ？ ああ!？」

よく見ればましろの発動した力に惹かれて、先程より巨大なバケガニの別個体が姿を現したのだ。

「グオオオオン!!!」

バケガニは暴れ始めようとするが……。

『プテラ！ トリケラ！ ティラノ！ プットティラーノザウルス！』

そんな電子音が聞こえ、頭はプテラ、胴体はトリケラ、下半身はティラノザウルスの様な仮面の紫の戦士「仮面ライダーオーズプットティラコンボ」がティラノの顔を思わせる斧型の武器「メダガブリュール」をバケガニの真上から振り下ろし、切裂く。

「ウガアアア!!!!」

「ギシヤアアア!!!!？」

オーズはヒビキ達の方に振り返る。

「光さん、どうしてここに？」

イブキが驚きながらもオーズに問いかける。

「いや、偶然この辺りを通りかけてさ。それで異変を感じて……、それより」

オーズはまだ倒されていない起き上がったバケガニを見る。

「よし、イブキ、トドロキ」

「「ああ」」

ヒビキは音角、イブキは音笛、カブキは黒の変身音叉、トドロキはリストバンド型の「変身音弦・音錠」の弦を鳴らし、それぞれ音を鳴らすと額に当てる。

ヒビキとカブキは炎、イブキは風、トドロキは雷に包まれ振り払うとヒビキは「仮面ライダー響鬼」、カブキは「仮面ライダー歌舞鬼」、イブキは「仮面ライダー威吹鬼」、トドロキは「仮面ライダー轟鬼」に変身を完了させる。

オーズはベルトのオーズドライバーにはめ込まれているメダルを3枚、赤いメダルに変え、左腰の「オースキャナー」というアイテムでドライバーの中央をスキャン。

『タカ！ クジャク！ コンドル！ タ〜ジャ〜ドル〜！』

頭はタカ、胴体はクジャク、下半身はコンドルを思わせ、胴体は鳳凰のようなものが描かれた赤い姿「仮面ライダーオーズタジャドルコンボ」に変身。

オーズを真ん中に、その右に響鬼と歌舞鬼、左に轟鬼と威吹鬼が並び、5人のライダーが集結した！

「「じゃあ、行くぜえ！！」」

轟鬼のそのの台詞を合図に、ライダー達はバケガニに走り出す。

「ハアア……ヤアア！！！！」
「オリヤア！！」

響鬼は音撃棒、オーズは方腕に装備した盾の様な「タジャスピナー」から炎を放ち、バケガニを攻撃。

轟鬼と歌舞鬼はバケガニに接近戦を挑むがバケガニは鋏を使い、轟鬼も歌舞鬼も払い飛ばす。

「「ぐわああ！！？」」

「裕理さん！」

「「裕理！！」」

「お兄ちゃん！！」

まして、アメリ、三九郎、ゆみなが歌舞鬼を心配する。

「俺は……？」

「すいません、今日会ったばかりだったので……」

なぜ自分だけ心配されないのかと思う轟鬼。

それに対して苦笑いで謝るましろ。

「ハッ！」

威吹鬼は烈風で鬼石をバケガニに撃ちこむ。

『タカ！ クジャク！ コンドル！ ギンギンギンギガスキャン！』

タジャスピナーにベルトのメダル3枚を入れてオースキャナーでス

キャンし、オーズは飛行して炎を身体に纏わせる。

その炎は鳳凰の形をしており、オーズはバケガニに突っ込む、この技は「マグナブレイズ」と呼ばれるオーズの必殺技である。

「ハアアア……セイヤアアアア……!!!!」

「ギシャアアア……!!?」

マグナブレイズを受けたバケガニは背中から倒れこみ、起き上がれなくなり、響鬼、歌舞鬼、威吹鬼、轟鬼全員の必殺技をバケガニに繰り出し、大量の清めの音を流しこみ、耐えきれなくなったバケガニは木っ端微塵に吹き飛んだ。

「グシャアアア……!!?」

「ふう、終わった終わった」

オーズは変身を解除すると、響鬼にある物を差しだした。

「はい」

「えっ?」

響鬼に渡された物は……蝶ガラのパンツだった。

「たまには両親にそっちらから会いに来てよ? ヒビキ……否……」

そこで少し間を置く光。

「ねっ? アムイ? 僕とフェイトの、息子♪」

五之巻 『囚われの少女』 (後書き)

巨大バケガニの童子と姫は既に倒してます。
因みにアムイはウルトラマンには今はなれません。
そして実は前の響鬼の弟子。

六之巻 『燃える戦士』 (前書き)

ライダー以外とも、共闘します。

六之巻 『燃える戦士』

あれから翌日、昨晚の事はヒビキ達を除き、美冬とゆみなしか覚えていないというのだ。

そして色々と話合った末、ましろは家からの通学が可能となった。元々フローレスは寮則が厳しく、外に電話するのもいちいち許可がいる。

だから今までましろが監禁されてる事に気付かなかった。

因みにあれから翌日、なんだか妙にましろの機嫌がよく、トドロキが気になって少し聞いてみる。

「姉さん、なんでそんなあねご機嫌なんすか？」

喋り方が本家になってるのは気にするな。

「てか姉さん？」

イブキが言うが気にせず、ましろは凄い笑顔で機嫌がいい理由を話す。

「あれから裕理さんと色々話してる内に、裕理さんも私の事が好きだと言ってくれたんです♪」

「ああ、成程」と思うイブキとトドロキ。

＊

その頃、ヒビキとカブキは鬼の鍛錬を行っていたのだが……。

「ギギヤアアア！！！！！？」

突然ヒビキの叫び声がイブキ達の方まで届き、イブキ、トドロキ、ましろは急いでヒビキ達のいる方に走って行くとそこでは……。

「お前なあ、ホント何時に帰ってくんだよ！ 待ってられねえからあたしから来てやったじゃねえか！！！」

赤い髪の女性が、ヒビキに色々とプロレス技をかけており、カブキは唾然としていた。

「いだだだだ！？ ギブギブギブ！！！」

「ひ、ヒビキさんが手も足も出無いなんて……！！！」

あのカブキの師匠であるヒビキが手も足もあの女性に出無いことに驚いているましろ。

だが、イブキはトドロキは「あゝあっ」という顔をしていた。

「きよ、杏子さん、そのくらいで許してあげたら……」

流石にカブキが止めに入ったが……。

「関係ねえのは引っ込んでろ!!」

と怒鳴られ、カブキはあまりの女性……「諸星杏子^{もろばしきょうこ}」の迫力に負けてしまった。

「あのお方は？」

「ああ、あいつは諸星杏子。2代目『魔法戦隊マジレンジャー』の『マジレッド』だ。それで、ヒビキの恋人なんだけど……」

聞きなれない言葉に首をかしげるましろ。

「マジレンジャー？」

「俺達、仮面ライダーの他にもこの世界を守り続けた戦士は沢山いる」

トドロキがそう説明し、どんな戦士がいるのかイブキが語り始める。

「さっき言ったマジレンジャーは『スーパー戦隊』と呼ばれる戦士達で、他にも『魔弾戦士』『レスキューフォース』『レスキューファイヤー』といった奴等もいるな」

そして今回、杏子がやってきた理由は……。

「ヒビキが中々会いに来ないから」との事。

「それにしても杏子！」

「なんだよ『龍刃』^{りゅうは}?」

「イブキな、今は。それより、いい加減許してやれよ」

倒れているヒビキにまだプロレス技をかけている杏子。

そしてヒビキは口から魂が出ていた。

「「ヒビキさああああん!!!!!!」」

カブキとましろの叫びがコダマした。

＊

その後、アメリカがやってきて、なんだかましろの下着を選ぶとか言
ってある部屋でましろの下着を色々選んでいた。

「要するにアレか、ノーパンで今まで過ごしてたのかあの獣耳」

「うん、その言い方はやめようね?」

上から順に杏子とヒビキが喋り、カブキがうっかりましろとアメリカ
のいる部屋に入ってしまった、追い出された直後にチャイムが鳴って
出てみると、美冬がそこにいた。

「美冬さん!?!」

何故彼女の様な存在が自分の家に？

という疑問があるが、どうやら話によるとフロ雷斯に太魂依らしき者が侵入したらしく、ましろに来るように頼みに来たのだ。

＊

フロ雷斯にましろは美冬と共に向かい、辿り着くと中庭らしき場所での噴水が壊されており、あちこち荒らされていた。

「やっぱり、太魂依の仕業なんでしょうか？」

ゆみながましろに尋ねると、ましろは頷く。

「恐らく『鵜^{ぬえ}』、幻術を使う3強の1人」

「なにか対抗策は無いのか？」

美冬の質問にましろは「えっ？」となる。

何故なら鵜の相手は自分とカブキがしようと思っていたからだ。

「泉戸裕理は男だ、立ち居れば即停学か退学になる。それに、フロレスは今まで自分達の手で侵入者に鉄槌を下してきた。太魂依が現れる度に君達の手を借りる訳にはいかない」

「裕理さんの持つ太魔の霊能をなしにして、鵜との戦いなんてありえません」

すると美冬はましろを睨みつける。

「他役立たず、とでも……?」

「えっ?」

とそこへ……。

「まあまあ、落ちつけよお前等」

木の上に杏子がポ○キーを食べながらこちらを見下ろしていた。

「杏子さん!?!」

「セキュリティを突破してきたのか!?!」

「んなもん、あたしにしちゃ、朝飯前だよ」

杏子は木から飛び降りる。

「まあ、そう警戒すんなって、あたしはアムイ……ああ、アンタ等にはヒビキって言った方がいいね。あいつの知り合いだからさ」

「それより……」と言い、杏子はましろ、ゆみな、美冬を見る。

「みんなで協力すりゃいいじゃねえかよ。ましろだっけ? 太魂依とかと人間の共存を目指すならお前に1つ教えといてやる。人間は自分自身の力で光になれる」

ましろ、ゆみな、美冬は「はっ?」という表情になる。

それが今となんの関係があるのだろうか。

「あたしのお父さんが言ってたんだよ。人はみんな光を持ってる。その光は、決して消える事無く、そしてどんな邪悪な敵にも屈する事は無いって……まあ、つまり、あたしが1番言いたいのは……」

杏子はニッと笑い……。

「お前が思ってるほど、人間は弱くないって事だ。確かにカブキの力も必要かもしれない、でも他の奴等の力もいる時はあるってことだ」

杏子はそれだけ言う。「後は自分で考えな」という言葉だけを残し、素早く去って行った。

その後、ましろ達は、じっくりと話し合い、全員で協力することになった。

正し、カブキの力は借りる。

ヒビキの力でもある。

＊

「と言う訳なんです、裕理さんを私の神通力で女体化させる訳ですが……、ヒビキさんはどうしましょう？ 流石に2人にも使うというのは……」

家に帰ったましろは、イブキとヒビキにそう相談するのだが……。

「あつ、あの人ならなんとかしてくれるんじゃない？」

手をポンツと叩き、イブキは「少し時間かかるよ」と言い、ヒビキ、イブキ、ましろは隣町のある神社まで辿り着いた。

「あの、ここは……？」

「イブキ、ここって『トウキ』さんの」

「ああ、あの人ならどうにかしてくれると思ってね、太魂依にも詳しそうだし」

と言う訳で、「トウキ」という人物に会い、今回の事を話そうとしたが……。

「分かっている、仏の声を聞いた。俺には全て分かっている。要するにヒビキを女体化すればいいんだな？」

「えっ？ なに？ 僕も女体化するの？ 聞いて無いよ!？」

イブキとましろはヒビキの両腕を抑える。

「実はこんなこともあろうかと密かにある鬼術を編み出していたのだ。では早速始める、効力は3日まで続くぞ」

「そんなに!？ ちょ、まっ……アアアア!!!!!!？」

そして、ヒビキの悲鳴が聞こえたとか……。

因みに、トウキも「鬼」であり「仮面ライダー凍鬼」と呼ばれるライダーである。

後、よく「仮面ライダー斬鬼」の「ザンキ」によく顔が似ていると言われている。

＊

翌日、フローレスの生徒をかき集め、美冬は鶴を追い出す様作戦を立てる。

生徒達がそれぞれ散らばった後、美冬はましろと杏子と女体化したカブキとヒビキの元に向かった。

「スタイルいいな、お前等」

「「放つという……」」

しかもカブキもヒビキも随分とスタイルのいい美少女になっていた。

ヒビキの場合は見た目所か見た目年齢まで変わっている。

「まさかここまで上手くいくなんて思いませんでした♪ これならいいですよね美冬さん？」

「はあ、中を確認するだけだぞ？」

フロアレスの校舎の中を確認、それだけをする予定で彼等……否今は「彼女」達はここへ来たのだ。

ヒビキ、杏子、ましろ、カブキは校舎の中に入る。

ましろに至ってはハンマーを持って警戒している。

『フフフ……』

急に笑い声が聞こえ、物陰からゼリーに仮面がつき、身体からそのゼリーののような触手が複数ある3強の1人「鵜」が姿を現した。

「鵜!!」

『罾とも知らず、ノコノコ入ってきよって』

「なに!？」

実は鵜は昨晚、自分の使いである蜘蛛をあちこちに巡らせる事で発動する罾を張っていたのだ。

そして鵜の身体から液体の様なものが溢れだし、それがカブキとましろの足の動きを封じる。

「しまった!？」

だがヒビキと杏子は高くジャンプして鵜の背後に回っており、ヒビキは変身音叉を取りだし、音を鳴らして額に当てる。

杏子は金色の携帯らしきもの「マジフォン」を取りだして、番号

を入力していく。

「ハアアア……タアア!!」

「魔法変身!! マージマジ……マジロー!!」

ヒビキは炎を振り払い「仮面ライダー響鬼」へ、杏子は赤いスーツにマントとマスクの戦士「マジレッド」に変身した。

「燃える炎のエレメント、赤の魔法使い!! マジレッド!!」

「鍛える豪華の鬼、仮面ライダー響鬼!! なんてね」

剣型の武器「マジスティックソード」を構えるマジレッドと、音撃棒を握る響鬼。

「音撃棒・烈火!!」

「マジスティックソード!!」

響鬼とマジレッドは鵺に飛びかかるが、ましろが鵺の触手に捕まり、ましろを盾にした為、響鬼とマジレッドに隙が出来、鵺は触手で響鬼とマジレッドを殴り飛ばした。

「ぐわああ!!!!?」

『バカめ』

「うううう、ぐああああ!!!!?」

苦しそうに声をあげるましろ。

「ましろ!!」

助けたいのは山々だが、美冬に合図があるまで決してなにもするな

と言われていた。

どの道、鬼になった所でましろを盾に使われる。

『どれ、貴様の神気を喰らってやろう』

ましろを食べようとする鵺、だがその時だ、突然鵺の発動している技が止まった。

「な、なに!?!」

太魂依が本来の姿になっていてもハッキリ見える者、つまり美冬やゆみな の指示により、鵺の蜘蛛を見つけ出し、潰していたのだ。

力が弱まった鵺はましろを解放してしまい、身動きが出来る様になったカブキがましろに駆け寄る。

「大丈夫かましろ!?!」

「は、はい、裕理さん……」

力が無効化された事に戸惑う鵺、すると階段から美冬が降りてくる。

「気付いていないとでも思ったか? こんなものを見つけてな」

『ぬう、おのれええええ!!!! ならばここで全員纏めて始末してくれる!!!!』

雷を放とうとする鵺だが、美冬がなにかのスイッチを押すと、屋上にあった非常時の時に使う……シャワーの様に水を流すものが発動し、鵺の身体を濡らす。

「ちゃんと覚えておきましょうよ、名前。そりゃ確かに普段使うこと無い方がいいんですけど」

はい、ましろさん。

「お前は水辺で雷を放ったことが無い、それは自分にも感電するから。以前お前は噴水の辺りで逃げたからかもしれないと思ったが」

『ぬう、だが貴様等如きにいい!!!』

「僕達を……」

「忘れんなあああ!!!」

響鬼の音撃棒とマジレッドのマジスティックソードが鵺を斬りつけて吹き飛ばす。

「ぬわああ!!!?」

「レッドファイヤー!!!」

炎を纏い、鵺に突っ込むマジレッド、それに加え、響鬼の鬼火がマジレッドの身体を包み、赤と紫の炎がマジレッドに纏わる。

「レッドファイヤー響鬼バージョン!!!」

マジレッドの突っ込みで鵺が吹き飛び、さらに美冬が木刀で鵺を斬りつけた。

『ぐおおお!!!?』

「少年、今だ!!!」

「はい!!!」

霊能の力を自分の右拳に集め、男に戻って倒れている鵺に叩きこむ。

『うわああああ!!!?!?』

煙があがり、だんだんと収まって行くと……。

「うう、もう嫌じゃ」

黒い着物を着た少女が泣きじゃくっていた。

「「「えっ?」「」」

ましろ以外の4人は間拔けな声を出し、目を丸くする。

「こんな……子供があ!?!?」

「信じがたいですが、これが鵜の本体のようですね……」

ましろもどうやら知らなかったらしい。

「「ごごごご、ごめんね!?!? あれが普通に本当の姿だと思ってたから!?!?」

「だから泣くな! あ、これ食うか? ポ○キー。 ホントすまねえ!?!?」

慌てて謝る変身を解いたヒビキと杏子。

子供を虐めてるみたいで気分が悪いのだろう。

だがまあ、鵜も変身していた訳で……。

「なぜ下着泥棒などを?」

「……着てみたかったからじゃ!」
「はっ!?!」

流石の美冬も素っ頓狂な声をあげてしまう。

「着てみたかったからじゃ!!」 その、昔は色々種類が着ものには無かったじゃろ? 今の女子の服は可愛いし、面白い。だから……／＼

ちょっと恥ずかしそうに話す鶴。

「だからといって人間には法などがある。太魂依といえそれを守らねば今回の様な目にまた合うぞ?」

「うるさいうるさいうるさい!!」 そんなの関係無いわあああ!!」

その様子を見て杏子是一言。

「まるでだだこねてる子供だな」
「現にお前は私達に負けた!!」

美冬のその一声で鶴は黙りこむ。

「お前も、私を虐めるのか? 人間も太魂依もみんなそうじゃ。よってたかってワシを虐める。だから仕返ししてやった、そしてら3強なんぞと呼ばれてもっと狙われる様になった」

だからあんな姿に変身していたのだ……。

「ならば、取引しないか?」

美冬は木刀を置き、鵜に微笑みかける。

「誰かが君を迫害しようとしたら私が君を守る。君が誰にも迷惑をかけなければ下着でも洋服でもなんでも用意してやる」

「ふ、ふん、業突く張りで自分勝手な人間の言う事など信用出来るか!？」

「ならば賭けてみるか？ さあどうする？」

美冬が鵜に手を差し伸べ、鵜は美冬を少し睨んだ後、決断。

「3日じゃ！ 3日だけ待ってやる!!」

「よし、じゃあ決まりだな」

「美冬さん……」

＊

そして3日後、見事に約束が果たされ、鵜は美冬と一緒に暮らすことになり、今日はまた鵜関連で下着のことでごちゃごちゃとなっていたとか……。

その頃、とある駅で……。

「ほんじゃアタシ、帰るけどたまにはそっちから帰って来いよ？
でないと拳骨100発お見舞いだ」

「ハハ、うん、近い内に帰るよ」

杏子がヒビキと別れをしており、杏子はそっとヒビキの頬にキスすると電車に乗って帰って行った。

「またね、杏子」

キスされた頬を触れながら、ヒビキは笑顔となるのだった。

六之巻 『燃える戦士』 (後書き)

響鬼とマジレンジャーは同時期に放送されていたからこのタッグはある意味スーパーヒーロータイムタッグだ。

七之巻 『装甲う鬼』 (前書き)

OP 「始まりの君へ」

ED 「キズナノ唄」

七之巻 『装甲う鬼』

「鍛錬とやらがどのようなものかと思いきてみれば……」

現在、美冬と鵜はカブキの神社に来ており、様子に見に来たのだが……。

「どうですか裕理さん？」

「ああ、いいよましろ」

ましろが裕理の背中に乗り、神通力によるマッサージをしており、惚気た声を出すカブキ。

「全く、とんだつけあきはじゃな。弱体化した白い獣とそんなんで3強と渡り合えると思っておるのか？」

嫌味的な事を言う鵜。

「現に君には勝てたじゃないか？」

「自慢じゃないがな、ワシは3強の中でも1番弱い！！」

美冬が「本当に自慢じゃないな」とツツコミを入れた。

「勝てる戦いしかせんかったから生き残れてきたんじゃ」

成程、どこぞのハードボイルド探偵ライダーの言ってたことを実行してたのだな、と思うカブキ。

「そう言えばヒビキさんは？」

美冬がカブキに尋ねる。

「ああ、ヒビキさんなら……修行に行ってるよ、『装甲響鬼』アームドヒビキになる為のね」

「アームド……ヒビキ？」

装甲響鬼とは仮面ライダー響鬼としての最強の姿であり、これになる為には今まで修行がヒビキ曰く必要とのこと。

「イブキさんとトロキさんはいるんだけどね」

とそこへ……。

「ツ／＼ど、どうでもいいけどさ！　いつまで触ってんのよ!？」

何時の間にかアメリカがおり、カブキとましろに向かって怒鳴っていた。

「ましろの神気で直して貰ってるんだ。そりゃ鬼の修行と合わせれば大変なの分かるだろアメリカ？」

「……まろまろもさ、恥ずかしくない訳!？」

だがましろは笑顔で……。

「私は裕理さんの妻ですから」

その無邪気な笑顔に言葉を失いそうになるアメリカ。

「そ、その妻って言うのやめなさいよ！　ユウも困ってるでしょ！

「？」

「いや、別に」

今度こそアメリカは言葉を失ってしまうのだった。

「こういう時ヒビキが必要だと思わないトドロキ？」

「言えてる、カオスにならなきゃいいけど」

少し離れた場所で苦笑いしながら見ているイブキとトドロキだった。

＊

その夜、女性が1人歩いていると、黒ずくめの男がゆっくりと近づき、女性が振り返ると男は首が伸びて女性に襲い掛かってきた。

「きゃああああ！！！！？」

「てりゃああ！！！」

だがそこへ乱入する鬼がいた。

「鋭鬼参上♪ 早く逃げろ！」

その鬼、「仮面ライダー鋭鬼」は「音撃棒・白緑」を構え、女性に逃げろと言った後、伸びた男の頭を蹴りつける。

「ぐはあ！？ 貴様……鬼！？ 俺の邪魔をするなあああ！！！！」

「そういうお前は……トウキさんが言ってた太魂依か」

身体の所々を蛇に変化させ、鋭鬼に攻撃して来る男だが、鋭鬼は音撃棒など弾きながら男に接近し、白緑を叩きつける。

「てりゃああ！！！！」

「ぐおおお！！？」

男は吹き飛ばされ、そのまま姿を眩ませて鋭鬼は辺りを見回すが男の姿はそこに無かった。

変わりに、先程逃げた筈の女性の悲鳴が聞こえ、急いで行くとそこには服でも分かる通り、先程の女性がミイラになって、死んでいた……。

「なんだよこれ。今の奴の仕業か」

その時、鋭鬼は背後に気配を感じ、ディスク状態のディスクアニマルを気配のする方に投げつけるが、ディスクアニマルを受け止められる。

そこに立っていたのは銀髪の男性であり、耳が尖っている。

「つたく、昔と違って今はロクな神気の持ち主がいねえ」

男性の言葉に首を傾げる鋭鬼。

「おい、俺を無視するな。お前……何者だ？」

鋭鬼は白緑を構え、男性を警戒する。

「ふん」

一瞬強い風が吹くと同時に男性は姿を消し、鋭鬼は見失ってしまった。

「逃がしたか」

＊

翌日の学校で……。

「ね、ねえ、ユウ、三ちゃん、昨日駅前で新しいゲームがあったんだ、だから3人でいかない？」

アメリカがカブキと三九郎を誘い、三九郎はOKを出し、カブキもOKを出そうとしたのだがましろが電話が鳴り、出ると最近隣街で女性が謎の死を遂げるという噂があり、調査に行きたいそうだ。

「うん、分かったよ。ごめん、アメリカ……アメリカ？」

カブキはアメリカの様子がおかしかったので顔を除く。

「アンタ、自分の時間1つ作れないの？ どんだけあの子の尻に敷かれてんのよ！？ 情けないと思わないの！？」

「な、なんだよ、僕も今日は付き合おうと思ってたのに！」

アメリカは「フン!」と言って顔を背ける。

ムツとする表情のカブキ。

「僕とましろは、ちょっと寄ってく所があるから」

カブキは三九郎にそれだけ言って去って行った。

「お、おう?」

＊

その後、現場に向かったカブキとましろ。

「どう? ましろ?」

「確かに神気は残ってますが……応龍や鳳凰がやったのならこの程度では済まない筈……」

つまり他の太魂依という訳である。

「なんかさ、ましろ、最近疲れてない?」

「へっ?」

「今度の休み、どっか行こうか? 3強や太魂依のことは忘れてさ」

「裕理さん……」

ましろはカブキに微笑み、カブキは行く場所を考える。

「博物館とかは遊ぶって感じじゃ無いな……」

「いいえ、そんなことないですよ!」

カブキとましろがそんな話をしてる時、変身を解いた状態の「仮面ライダー鋭鬼」となっていた人物「エイキ」が歩いてきた。

「よう、カブキ」

「エイキさん!？」

「なんだ、デートか? このマセガキめ」

笑いながらカブキをからかうエイキ。

「そ、そんなんじゃないです!」

「あの、裕理さん……こちらは?」

ましろにエイキのことを紹介し、自分と同じ鬼であることを説明した。

因みに、その様子をアメリと三九郎がこっそり伺っていたとか……。

＊

翌日、アメリが今度休みにカブキと一緒に映画を見に行こうと誘い、それはカブキの好きなバイク映画なのだが、今度の休みはましろの約束もある。

その為カブキはましろも連れて行こうとしたのだが、アメリカはカブキと2人だけで行きたかった、だからカブキと喧嘩となってしまう、アメリカはそのまま帰って行ってしまう。

その夜、バイクの整備をしていたカブキにましろはアメリカのことで話しがあると言う。

「もしかしてアメリカさんは……裕理さんのことが好きなのでは？」

ましろがカブキにそう尋ねた時、動揺しながらもカブキはそれを否定し、ただの幼馴染だと主張。

「それはどうかなカブキ？」

そこにイブキがやってきて話に加わる。

「イブキさんまで……」

「よく言うよね？ 女心は複雑。全く、ヒビキもカブキのこういう方面も鍛えればいいのに……恋愛したことある癖に」

少し愚痴っぽくなってしまいうイブキ。

「あの、裕理さん。私アメリカさんと1度会ってゆっくり話したいんです」

「あ、うん、分かった」

カブキは電話をアメリカにかけるが、着信拒否されてしまう。

それに腹を立てたカブキはバイクに乗ってアメリカに直接会いに行く

ことに。

「なんか俺心配だからカブキを追うよ。 ましろちゃん留守番よろしくね!」

「あっ、はい!」

イブキはカブキをバイクで追いかける。

＊

その後、カブキは雨の中傘をさして歩いているアメリを発見し、バイクから降りてアメリに踏みよる。

「アメリ!!」

「な、なに雨の中バイクに乗ってんのよ!？」

「なんで着信拒否するんだよ!!」

アメリに怒鳴るカブキ。

「ッ……うざかったから!!」

「えっ? それだけ? 本当に、それだけ?」

ウザいという理由では無い気がカブキはしていた。

「ましろがお前と話したいって、だから電話したのに……」

ましろの名前を聞いて怒りがこみ上げるアメリ。

「どこがいいのよ、あんな化け物!!」

「ッ!!!?!」

カブキは以前ましろが自分のことを化け物と言っていたことを思い出し、カブキも怒りが込みあげてきた。

「おい、訂正しろ……。化け物って言ったことを訂正しろよ!!」

本気で怒り、本気でアメリにカブキは怒鳴る。

「うえッ!?!」

怒鳴られて涙目になるアメリはそのまま何処かへと走り去ってしまった。

「お、おい!!」

*

その後、アメリカはバッティングセンターに行き、「ユウのバカー！
！」と言いながらバットでボールを打っており、その帰り……。

あの男がアメリカの前に現れた。

「ヒヒヒ……お前の神気を頂くぞ」
「なッ!？」

突然のことに動揺するアメリカだが、男はすぐに首を伸ばしてアメリカに襲い掛かってきた。

しかし……。

「てりゃあ!!」

電撃を拳に纏わせたパンチを男に喰らわせ殴り飛ばす「仮面ライダー轟鬼」が現れた。

「アメリカ、大丈夫か!？」

「トドロキさん……!」

「ここは俺に任せてお前は逃げろ!!」

アメリカは「はい!」と答え、そのまま走り去る。

「鬼が、また邪魔を!」

男が轟鬼に襲い掛かるが轟鬼は男の背後に回り、烈雷を突き刺す。

「ぬわあ!？」

音撃震・雷轟を烈雷に取りつけ、弦を引く。

「音撃斬・雷電激震!!」

「ぬわあああ!!!!!!」

男は吹き飛び、大ダメージを負う。

「これ以上を人を襲うな」

「……やだね」

男は何処かへと去って行き、轟鬼は追おうとしたが見失ってしまった。

一方、アメリの前にあの銀髪の男が現れる。

「あなたは？」

「お前を探していた……」

「えっ？」

因みに、あの首が伸びる男は数分後銀髪の男……人間の姿の「応龍」により殺された。

*

翌日の学校では、あれからアメリを雨の中探していたので風邪気味のカブキ。

それを心配するアメリ。

「どうしたのユウ！？ 今にも死にそうな顔だけど！？」

「どうしたって、アレからずっとアメリを探してたんだよ……」

「ええ！？ ごめんねユウ、ホントごめん！」

アメリはカブキの服の袖に手で触れるとその手が一瞬青く光、カブキの体調が治る。

「アレ？ なんだか急に身体が軽くなったぞ！？」

だがそこでアメリが気になる言葉を……。

「もうすぐ、全部終わるから……」

「えっ？」

その時だ、空が紫に染まって渦を巻き始めた。

「な、なんやこれ！？ 裕理、まさか……！」

「太魂依……！？」

そう、これは太魂依、3強の1人「応龍」の仕業であり、彼の神通力により殆どの人間が動きを封じられてしまった。

急いでフロールにカブキは向かい、ましろ、美冬、鶴と合流。

「私はなんとか鶴のおかげで動けるが……」
「まさか応龍の奴、当たりを引きよったか？ 逃げるぞ美冬、勝ち目が無い」

応龍相手に自分達では勝てない……、だが美冬はそれを認めはしない。

「ふざけるな！ このまま放っておけるか！」

鶴は仕方なく自分の神通力で美冬の動きを封じる。

「美冬はワシの最初の友達、失う訳にはいかん。 白い獣、やちまた、大丈夫か？」

「ええ、少なくとも学園からは離れさせます！」

「勝てばいいんだよね、勝てば！」

鶴は2人の言葉を聞いた後、美冬を連れてすぐに逃げ去った。

カブキとましろは空から現れた龍の姿をした応龍の元へと行く。

「応龍！！」

『やっとお出ましか』

「今すぐ術を解き、みんなを自由にしなさい。 さもないと……」

『さもないとなんだ？』

ましろはそれ以上は答えず、ハンマーを出す。

『聞くだけヤボってか。 ならこっちも容赦しねえ！！』

カブキは変身音叉を取りだし額に当てる。

「はあああ……やああ!!」

「仮面ライダー歌舞鬼」に変身したカブキ。

流石に今回は生身で戦う訳にはいかない、鬼の力で応龍を弱らせた後、自分の神気を使って応龍を大人しくさせる。

そう考え今回は最初から変身することにした歌舞鬼。

応龍は炎を放ってきたがましろは札を4枚投げ、炎を押し返して札は応龍の動きと力を封じ込めた。

『ぐっ、俺の神気を!?!』

「裕理さん今です!!」

「ああ!!」

歌舞鬼が音撃棒・烈翠を構えるが、突然身体に力が入らなくなり、烈翠を落として変身が強制解除されて倒れてしまう。

「裕理さん!?!」

『はん、そいつは当分動かねえよ』

「だったら私だけでも!!」

高く飛び上がり、ましろはハンマーを応龍に振るったが、突然応龍が消えたのだ。

「消えた!?!」

『お前のやることなんぞお見通しなんだよ!! 俺の影相手に随分神通力を使った様だな!?!』

気付けばその長い蛇の様な身体を利用し、ましろの周りを身体で囲んでおり、応龍の放った電撃がましろを苦しめる。

「うああああ!!?!?」

「まし……ろ……」

ましろを助けようと手を伸ばすカブキ。

だがやはり力がどうしても入らない。

その時、自分の肩をポンツと叩く男性が現れた。

「後は僕に任せて、少年。 シュッ!」

その男性は……カブキの師匠である「ヒビキ」、装甲響鬼になる為の修行を終えて帰って来たのだ。

「ヒビキさん……、ましろを……助けて!」

変身音叉・音角の角を鳴らして額に当てるヒビキ。

「任せなって」

炎に包まれるヒビキは腕を振り払うと「仮面ライダー響鬼」へと変身を完了させた。

「はあああ……てりゃああ!!!」

響鬼はましろを助けるため応龍に突っ込んで行く。

「ぐわああ!!?」

当然、即ちそれはましろが受けている攻撃を響鬼も受けることになる。

大ダメージを受け、再び幼い少女の姿に戻ってしまっているましろを響鬼は抱えて高くジャンプし、応龍から逃れた。

「はあ、はあ……」

『くそ、鬼に動きを止める神通力は通用しねえか』

響鬼はましろを降ろし、応龍に振り返る。

「鍛えてますから! シュツ」

『幾ら鍛えようが俺には勝てねえよ!!』

「それはどうかな?」

響鬼は1つの剣「アームドセイバー装甲声刃」を取り出す。

響鬼はアームドセイバーの持つ所の下のスイッチを押す。

「響鬼 装甲」

響鬼の身体は全身が赤い「響鬼・紅」の姿に一瞬だけなり、さらに複数のディスクアニマルが響鬼の身体に纏わる事で鎧のようになっていき、最後にアカネタカが響鬼の胸に装着され角が4本となり、額に「甲」の文字が浮かんだ響鬼最強の姿……「アームドレベキ装甲響鬼」へと強化変身した。

『なんだ、その姿は!?!』

「装甲響鬼ってね。 5年かけてようやくなれたよ」

アームドセイバーを握り、響鬼は応龍に向かい走って行く。

『そんなこけ脅しが!?!』

炎を吐く応龍、だが響鬼はアームドセイバーで炎を受け止め、その炎を響鬼は応龍に弾き返した。

「せりゃあああ!?!」

『ぐわああ!?!?』

予想外の出来ごとに驚く応龍。

『跳ね返しただと!?! 俺の炎を!?!』

「今日の所はお帰り願うよ」

響鬼はアームドセイバーの前方にある刃を倒す。

「鬼神覚声……はあ!?!」

アームドセイバーから音撃波と呼ばれる衝撃波が応龍に放たれ、それが応龍に直撃。

『ぬうう!?! チツ、今日はこのくらいにしておくか、白い獣も痛めつけたことだしな!?!』

応龍はそのまま空へと消え去って行ったのだが、カブキは一瞬、その近くに黒い翼を生やしたアメリカがいた気がした。

しかし、カブキはそこを目を閉じてしまい、気を失った。

七之巻 『装甲う鬼』 (後書き)

鋭鬼は今回ゲスト出演。

八之巻 『疾風する鬼』

あれからましろは神気をかなり消耗した為、幼女の姿に戻ってしま
い泉戸家に連れて帰った。

念の為に美冬と鶴はゆみなに応龍のことを報告。

「お義姉様とお兄様が太魂依に襲われたって本当なんですか!？」
「ああ、すまない、力になれなくて……」

義理と言えカブキはゆみなの兄、美冬はゆみなに申し訳無さそうに
誤っていた。

「だから逃げろと言ったんじゃない……」

実はあの時鶴はカブキとましろにも逃げるように言ってたのだ。

「でも、パワーアップしたヒビキさんのおかげで追い払う事は出来
た。ただましろは神気を消耗して今は子供の姿に戻ってしまっ
ている」

ゆみなは「大丈夫なんですか?」と尋ねると鶴はこう答える。

「ああ、しばらく安静にしておれば元に戻る」

そして部屋に戻ったゆみなは窓の外を見ると流れ星が見えた。

ゆみなは流れ星に願った、「自分にも兄やましろを助けられる力が
欲しい」と……。

未だに女体化の件を根に持つてるビビキは、ましろを起こしに行こうとしたがそれよりも早くましろが飛び起きてリビングにやってきた。

「はわわわ!? ごめんなしやい! 朝ごはんすぐにつくります!」
「大丈夫だよましろちゃん、僕がもう作ったからさ。 ましろちゃんやゆみなちゃんより上手くないけど」

それよりもカブキはましろの身体の具合を心配する。

「もうだいじょーぶです! はっ!?!」

そこでましろは尻尾を「ビクン!」と跳ねあがらせ裕導の見ていた新聞に「墜落・飛行機事故」と書かれており、それを凝視するましろ。

「これは……」

その中には赤と青の光の巨人が救った記事もあった……。

＊

その後、カブキは学校へ行き、三九郎とアメリの後ろの席に座る。

「おはようさん」

「おはようユウ」

三九郎とアメリに挨拶されてカブキも「おはよう」と返すがどこか疲れてる感じだった。

「あれからまるまるの様子はどうか？」

一瞬アメリの顔を見て黒い翼が生えたアメリの姿を思い出したが「まさかな」と思い考えるのをやめる。

「ああ、動き回れるくらいにはなったよ」

その言葉を聞いてアメリと三九郎も安心の表情を見せる。

「この間ましろちゃんいきなりちっこくなってビックリしたわ」

そこでアメリと三九郎はましろのお見舞いに行こうかという話になったのだが、カブキにはなにか事情があるらしく断った。

その時、フローレスからカブキに呼び出しの放送がかかり、カブキはフローレスの正門前に行く事になった。

そこでは美冬、鵜、ましろ、ヒビキ、イブキ、トドロキもいた。

「あつ、ゆーりしゃーん！」

「ましろにヒビキさん達！？」

美冬によると、なにやらまた別の太魂依が現れたとのことで、カブキがそれを聞いて色々と騒ぎ出す。

「くそー、まだましろの力が戻って無いって時に。 大丈夫だましろ！ 俺1人でも戦って見せるから！！」

「って話を聞けやちまた！！」

鵜が言うが、カブキは全く耳に入っていない。

「俺が相手だ出て来い！！」

変身音叉を取り出すカブキをイブキが止める。

「落ち付けカブキ、その太魂依なんだがな？」

「はい」

すると物影からブサイクな太ったヒヨコみたいなのを頭に乘せたゆみなが出てきた。

話によると、昨日ゆみなの部屋に飛び込んで来たのは雄の鳳と雌の鳳、2体を合わせて「鳳凰」と呼ばれる3強の1体なのだが、その雄の鳳は弱ってる所をゆみなに看病して貰い、何故か頭から離れなくなってしまったのだ。

本来の姿は巨大な鳥なのだが、今のましろと同じく殆どの神気を使い果たしてこんな姿になっているのだ。

「外してみようか？」

トドロキが鳳を掴んで引っ張るが中々外れず、それに怒った鳳がくちばしでトドロキを突いてきた。

「いでででで!?!」

「トドロキ、そりゃもつと優しくやらないとさあ」

ヒビキが優しく外そうとするもやはりくちばし攻撃を喰らう。

『グエエ!?!』

「あだだだ!?!?」

「このままでは授業に出ることも出来ないなあ」

美冬がそう呟くとゆみなは「それは困ります!」と言って泣きだしてしまふ。

「これはゆみなに与えられた罰ですか!?! ゆみなが悪い子だからこんなことになってるんですかああああ!?!?!?」

「あわわ……ゆみなちゃん落ち付いて!」

騒いでるゆみなに鳳は口ばしでゆみなを突く。

「痛い痛い!?!? ごめんなさーい!?!?」

カブキはゆみな肩に手を置く。

「そうだよ、それに罰なんかじゃない」

「そうそう、ゆみなは鳳を助けたいと思ったから助けた、そうだろう?」

上から順にカブキとイブキが喋る。

「そうですよ、そんな優しいゆみなさんに罰なんてあたるわけないですよ!」

その後、他のみんなからも励ましの言葉を受けるゆみな。

すると鳳の姿が突然消えて行く。

どうやら鵜の説明によるとゆみなの中にもある神通力を使って姿を消したとの事。

そしてましろはこのまま行くともしかしたら鳳と戦う必要が無く、分かり合えるかもしれないらしい。

「ほう、貴様の言う共存か……」

「じゃあ現状維持が必要だよな」

上から鵜とトドロキが言うのだが、四六時中ゆみなの傍にいる訳にはいかない、大体フローレスは男子立ち入り禁止。

「そうだよねえ、ずっといる訳にはいかないし……」

「大丈夫だ、問題ない」

ドヤ顔のイブキの言葉でヒビキはなにか嫌な予感を感じる。

「まさか……」

その後、カブキは鵜の力が込められた「勾玉」により女性になることが出来る。

つまり、これで問題なくフローレスに入ることが出来るのだ。

「ぬう、わたしだって力がもどっていればこんなこと〜！」

「変化の術はワシの方が得意じゃからな、ちびっ子は引っ込んでおれ」

「あなたの方がちびっ子じゃないですかー!!」

「なんじゃとおー!!」

などと言い争うましろと鶴。

「ヒビキはトウキさんの所行くぞ」

トドロキとイブキに引っ張られ、トウキの元へ向かうヒビキ。

「やーめーろー!!!!」

どこぞの肩に不気味な人形を乗せたドクターみたいに叫ぶが結局無理やり連れて行かれた。

＊

トウキの神社。

「という訳でお願いしまーす!」

「ああ」

「ちよっと待ってちよっと待ってええええええ!!!!!!」

トウキの鬼術により再び女性の姿になってしまったヒビキなのだが……。

「トウキさん、もう1回分くらい出来ますか？」

「出来るがどうした？」

ヒビキがイブキの腕を掴み、トウキに差し出す。

「はっ？」

「イブキにもお願いしまーす」

「ええええええ!!!!!!」

という訳でイブキも鬼術により女体化してしまったのだった。

＊

翌日、ヒビキとカブキとイブキは女体化してフロアレスに潜入。

ゆみななのいる教室の転校生となった。

「泉裕子いずみゆうこです……。 よろしくお願いします」

やれやれといった感じの表情で挨拶するカブキ。

「風上アムイです」

「風上龍刃です。 アムイとは親戚同士です」

（本名で名乗るんですか！？）

カブキはゆみなの隣に座る。

「お兄様と一緒に授業出来るなんて夢みたいです！」

「アハハ……」

その後、カブキは必要な授業だけは元の学校の方で受け、それ以外の授業は抜けてフロアレスの授業に参加するという行ったり来たりとなったわけである。

「大変だねえ、カブキ」

「ていうかこれ俺達いる意味あるのか？」

ヒビキとイブキがそんな会話をしているが、元々はイブキのせいだと言いつけるヒビキ。

＊

翌日、屋外スケッチの授業を山ですることになったフロアレスの生徒達。

カブキ、ゆみな、イブキ、ヒビキは一緒に行動することに。

「フロアレスにも屋外スケッチとかあるんだ。 ちよつと以外」

「でもこの山全体フロースの敷地内なんですよ？」

ゆみなのその言葉に、カブキ、ヒビキ、イブキは「ええええええ！！
？」と声をあげる。

「色々間違ってる気がするよこの学校……」

そこでカブキの姿が突然元の男性の姿に戻ってしまった。

「またお兄様に戻ってしまいましたよ！？」

「鬼術と違って長続きしないんだな、その勾玉」

そう、勾玉の効力が切れたのだ。

「確か昼前には美冬と鵜がくるよな？」

イブキが言い、カブキは頷く。

「じゃあしばらくはお兄様の姿で一緒にいられますね！」

どこか嬉しそうにするゆみな。

その後彼等は山の天辺にまで来て街を眺めていた。

「昔はこうやって山登りでこうやって街を眺めたりしましたよね」

「ああ、僕とゆみなとアメリの3人で……」

懐かしむように街を見るカブキとゆみな。

少し離れた所でヒビキとイブキも街の様子を眺めている。

「おお、綺麗な風景だな」

「空気も美味しい、アレ？　なあ、ヒビキあれ……」
「んっ？」

イブキが空を指差すとそこには大量のカラスがおり、それに反応するかのよう鳳もゆみなの頭で騒ぎだす。

「グエエエ！！」

「えっと、あれは鳳さんのお友達ですか？」

しかし鳳は首を横に振るう。

「違う見たいです」

そして突然カラスの1匹がゆみなを狙って襲いかかって来たのだが、カブキがゆみなを庇ってカラスの突撃から避ける。

「カブキ、こいつ等ただのカラスじゃない！！」

ヒビキとカブキは変身音叉、イブキは音笛を取りだし、ヒビキは「仮面ライダー響鬼」、カブキは「仮面ライダー歌舞鬼」、イブキは「仮面ライダー威吹鬼」に変身。

「「「はあああ……てやあああ！！！」」」
「わあ」

3人の同時変身に目を輝かせるゆみな。

そして襲いかかって来るカラスを響鬼と歌舞鬼は音撃棒で叩きつけ

たり受け流したりする。

「はああ!!」

威吹鬼は蹴りでカラスを蹴り飛ばし、時には烈風でカラスを叩きつける。

「ゆみなちゃん、取り合えず逃げよう!」

歌舞鬼はゆみなの手を引っ張ってカラスたちから逃げる。

「今はそれが得策だな」

「だね、ゆみなちゃんを守るのが先決」

森の中を走り、振り切ったと思いそこで少し休憩する。

「ここまでくれば……」

「大丈夫じゃないみたいだなあ」

響鬼はアームドセイバーを出し、下部のスイッチを押す。

「響鬼・装甲」

赤い炎に包まれてディスクアニマル達が響鬼の身体と合体し、響鬼は「装甲響鬼」へと変身。

「はああ……たああ!!!!」

辺りを見回せばカラスたちが木の影に隠れてうようよしている。

「ゆみなちゃん僕の後ろに隠れて」

ゆみなを歌舞鬼の後ろに隠れさせ、カラス達を迎え討つ。

しかし、カラス達のスピードが速すぎて歌舞鬼は右の横腹カラスの口ばしで少し切裂かれ血が出てしまう。

「ぐうう!？」

「お兄ちゃん!!」

「「カブキ!!」」

歌舞鬼の一瞬の隙をついたカラスが歌舞鬼を集中的に攻撃する。

「ぐわああ!!?」

それでも耐えてゆみなを守ろうとする歌舞鬼。

「もうやめてえ!! このままじゃお兄ちゃんが……」

「大丈夫、大丈夫だから!」

「どうしてそこまで……?」

涙を浮かべながらゆみなは歌舞鬼に尋ねる。

「覚えてるかな? 母さんが死んで、アメリカと喧嘩してもうどーでもいいやって思った時、ゆみなちゃんだけが傍にいてくれた。ゆみなちゃんが僕を励ましてくれて、だから今度は僕がゆみなちゃんを守る番。 君は……俺の大事な家族だから」

「そうだ、家族を守るってのは当然のこと。 いいこと言うじゃねえか、カブキ」

威吹鬼は両腕を交差する。

「本当は夏の魔化魍に備えてとっておいたけど、装甲響鬼ほどじゃないけど響鬼・紅に匹敵する俺の新しい姿、見せてやるよカラス共。ハアアアア……!!」

威吹鬼の周りに青い風が巻き起こり、両腕を勢いよく広げると威吹鬼の身体の黒い個所が青色に変わった姿、「仮面ライダー威吹鬼・疾風」へと姿が変わる。

「威吹鬼、その姿……」

「鍛えてるのはお前だけじゃ無いぞヒビキ」

威吹鬼は腕に風を纏わせ前に突き出すと突風が放たれ、突風はカラス達を次々に吹き飛ばす。

「威吹鬼・疾風……ってね」

九之巻 『二頭の鳥』 (前書き)

今回は響鬼のオリフォームが。
変身するのはあの人ですけどね。

九之巻 『二頭の鳥』

カラス達がヒビキ達に襲い掛かる前日の夜。

戦闘機が空を飛んでおり、そこに巨大な赤い鳥、鳳凰の内の1体「凰」が現れる。

凰は戦闘機に襲い掛かり、戦闘機は操縦不能となってしまう、墜落してしまう。

「うわああー！！！！？」

しかし、その戦闘機を掴み、窮地を救ってくれた光の巨人が現れた。

「……ウルトラマン……ゼロ」

パイロットは赤と青の身体の巨人、「ウルトラマンゼロ」の姿を見る。

ゼロは戦闘機を光で包むと、その戦闘機は地上へとゆっくり降りて行った。

「最近の飛行機事故はテメーの仕業か……。これ以上、好き勝手はさせないぜ！！」

ゼロは一瞬口を拭く仕草をすると、凰に向かい戦いを挑んだ。

「シェア！！」

凰に右足に炎を纏わせた「ウルトラゼロキック」というキックを凰に炸裂するが、凰は上へかわし、ゼロの背後に回り込んで背中を口ばしで突く。

「ぬわあ！？ デヤアア！！！」

しかし、ゼロは後ろ廻し蹴りを凰に放ち、凰は後退し、そのまま何処かへ飛び去る。

「キエエエエ！！！！」

「待ちやがれ！！」

ゼロが追おうとするも、凰はかなりのスピードでゼロから逃げ、そしてゼロを振り切り逃がしてしまった。

「逃がしたか……」

＊

そして現在。

装甲響鬼と威吹鬼・疾風による連帯攻撃にカラス達は次々撃退されて行く。

「そりゃあああ!!!」

威吹鬼は烈風から風を纏わせ、放たれるスピードとパワーが早くなった鬼石をカラスに撃ちこむと、そのカラスは身体に赤い線があったのだが、その赤い線は消えて普通のカラスに戻り、どこかに行ってしまう。

「操られてるだけかこいつ等」

だがその時、赤い巨大な鳥の凰が現れ、今にも響鬼達に襲い掛かりそうな勢いだった。

「こいつが親玉かあ」

響鬼はアームドセイバー、威吹鬼は烈風を構え、凰と戦い始める。

「キエエエエ!!!!」

翼を羽ばたかせて突風を響鬼と威吹鬼に放つが、2人は高く飛び上がり、凰の頭に蹴りを喰らわせる。

「キエエエ!!!?」

「はあああ!!!」

さらに威吹鬼が疾風となった事で新たに追加された麻酔と同じ効果があるモードに烈風を切り替え、麻酔弾を凰に撃ちこむが……中々効かない。

「キエエエエ!!!!」

翼を広げ、その翼で響鬼と威吹鬼を吹き飛ばす。

「「うわあああ!!!?!」」

歌舞鬼は基本的にゆみなを守っており、だが、このままではキリが無い。

ゆみなは鳳に願った。

兄やイブキ、ヒビキを助けて!っと……。

「鳳さんは鳥さん達を従わせることが出来るんですね!? だったらお願い、お兄ちゃん達を助けてあげて!!」

すると鳳の身体が輝き、鳳は本来の姿である青い鳥の姿となり、飛び立つ。

鳳を追い掛ける様に、カラス達を引きつれて鳳は鳳について行った。

「そうか、鳥達を操っていたのは……」

鳥達を操っていたのは鳳凰の内の1体、鳳だった……。

「キエエエ!!」

その後、変身を解除し、カブキは座り込んで休んでいた。

しばらくして鶴と美冬がやってきた。

「鳳凰は大気を操り竜巻を起こす。人間なんぞあつという間じや、それで無事でいられたのは流石やちまたというべきか鬼というべきか……」

「まっ、僕もカブキ鍛えてますから！」

ヒビキが右手を廻して「シュッ！」とやる。

「あれ？ 俺は？」

「あっ、いたのイブキ？」

「酷い！？」

半分存在を忘れかけられていたイブキ。

イブキは体育座りして「Orz」とやっていた。

「ごめんごめん、冗談だよ」

苦笑いしながらイブキに言うヒビキ。

「裕理、今日はゆみなを連れて早退した方がいい。凰のことは一先ず忘れて、今日くらいはご家族と一緒にの方がいいだろう、手続きは私が住ませておく」

「ありがとう、美冬さん」

そこへ、ましろが凄いジャンプ力でこちらに向かってきているのが見えた。

「ゆーりしゃーん！ ゆみなしゃーん！！ ごぶじですかー！？」

「裕理の家ならましろもいるし、ヒビキさん達もいる」

美冬の提案でカブキは頷き、ヒビキとイブキ、カブキも帰ることになった。

帰る際に美冬はヒビキとカブキと少し話をしていた。

「風の行方はこちらでも探ってみるよ」

「うん」

「よろしくね、美冬ちゃん」

＊

その後、泉戸家に帰り、美冬の頼みで鶴が様子を見に来てましろ、ゆみな、鶴は風呂に入っていたのだが、その間に神気を使い果たした鳳が太ったヒヨコの姿でゆみなの頭に戻ってきた。

それを見たヒビキ、イブキ、カブキ、トドロキは「はあ」とため息をついていた。

「まあ、ゆみなちゃん。元氣出しなよ」

イブキがゆみなを励まし、ゆみなは「はい……」と答えるがやはり元氣が無さげ。

カブキはバイクの整備室でましろと話しており、美冬に風の行方が

掴めたかケータイで聞いた所、やはりまだ掴めないらしい。

「はいどーぞ」

ましろがお茶をカブキに渡し、カブキは「ありがとう」とお礼を言った後にましろからお茶を受け取る。

「やっぱり美冬さんの方でも行方は掴めて無いって」

「そう……、本来鳳凰の2頭は一緒にいようとするはずなのに……」
なぜ別れているのか、それがどうしても分からなかった。

「あつ、それと美冬さんがゆみなちゃんのこと色々してくれて有難うって」

「いいえ、ゆーりしゃんこそ、ゆみなちゃんをほんとに大切にしている」

少し照れてカブキはお茶を飲む。

「まあ、妹だからね……」

「ちょっぴり妬けます」

「ごほっ!？」

*

ゆみなは以前泉戸家で使っていた部屋でベッドで寝転がっており、やはり、自分はカブキ達の為になにか出来ないのかと悩んでいた。

「私、美冬先輩みたいにリーダーシップがある訳でも無く、アメリカさんみたいに明るい訳でも無く、ましろお姉様みたいに力がある訳でも無く、結局ゆみなはダメな子なんです……」

マイナス発言した為か、鳳は目をキラーンとさせて口ばしでゆみなを突く。

「痛い！　痛い！　もうマイナス思考やめるからやめてえ〜！？」

その時、一匹のカラスがこちらを睨んでいるのにゆみなは気付く。

＊

「あっ！　今、強い太魂依の気配が……」

ましろは鳳の気配を感じ取り、カブキと一緒に外に出て見ると空には赤い巨大な鳥、「鳳」が飛行していた。

「キエエエー！！」

鳳は翼を羽ばたかせて強烈な突風を放つ。

「威吹鬼・疾風」

そこに威吹鬼・疾風、仮面ライダー轟鬼が現れ、威吹鬼は両手を前に突き出し強力な突風を放って鳳の突風とぶつけ合わせて相殺する。

「きゃああっ!?!」

後ろを振り向くとそこには鳳を抱えたゆみなが悲鳴をあげていた。

「ゆみなちゃん!!」

「クエエエ!!」

鳳は必死にどこかに行こうとするのをゆみなは鳳を掴んで止めようとする。

だが、突然鳳の身体が輝き、本来の姿に戻ったのだが、インコサイズで小さく、突然のことにゆみなは戸惑い鳳の足に掴んだまま、鳳は空を飛ぶ。

「ふええええ!!?!」

「ゆみなちゃん!!」

鳳は鳳を追い掛け、カブキは後ろにましろと鶴を乗せてバイクを走らせ、響鬼と威吹鬼もバイクで追いかける。

だがその途中、道路で等身大の魔化魍、ワニと蛇と蝙蝠を合わせた「ヨブコ」が立ち塞がった。

「なんでこんなところで魔化魍がでるんですかー!?!」

こんな時にヨブコが出るということに苛立つましろ。

よく見ると1台の車が停まっており、車には血の後らしきものがついていた。

「どうやら、人を食べてたみたいだな」

響鬼は仮面の下でヨブコを睨みつける。

威吹鬼と響鬼、轟鬼はそれぞれバイクから降りてカブキに先に行くように言う。

「はあああ!?!」

音撃棒でヨブコを叩きつけ、威吹鬼が風を纏わせた足でヨブコを蹴りつけ、烈雷でヨブコの背中を斬りつける。

「グシャアア!?!」

*

そしてある山道の道路で鳳をゆみなごと足で掴んでいる凰を発見。

ましろの神通力をバイクに注ぎ、助走をつけて変化した鶴の身体の上を走ってカブキの乗ったバイクは宙を舞う。

「ワシこんな役いやじゃー!!」

するとバイクから翼が生え、そのままバイクは凰に向かい、凰の頭に激突。

「キエエエ!!?」

「ゆみなちゃんを……離せえ!!」

右拳をカブキの大麻の霊能の力で光らせ、凰の頭を殴りつける。

「キエエエ!!?」

それが効き、凰は消え去りゆみなと鳳、カブキが地上へ向かって落ちて行く。

「おわああ!!? くっ」

カブキは変身音叉を出すを手を滑らせてしまい、音叉を落としてしまふ。

「しまった! だけど!」

ゆみなを抱きかかえる。

「ぼーっとしてないでたすけにいく!」

「お、おう」

ましろに言われ、鵜はカブキ達を助けに向かうが、間に合わない。

カブキは目を閉じた時！

「あ、アレ？」

目を開けるとカブキは白い翼を生やし、空に浮いているゆみなの腕の中にいた。

そして2人は金色の球体の中におり、カブキは「ゆみな……ちゃん？」と言う。

「えへ。　　なんだか鳳さんが力を貸してくれたみたいで……」

ゆみなの服の中から鳳が頭だけをひょっこり出す。

「クエエ」

そこへ鳳と同じようにインコサイズの鳳が落ちて来て鳳の頭に激突。

2匹は目を廻して気を失った。

「もしかして鳳さん!？」

球体はゆっくり地上へ降り立ち、ましろと鵜は2人が無事なのにほっとした。

そこで鳳凰2匹は目を覚まし、なにやら喧嘩を始め出した。

「うええ!？」

「こ奴等……」

なにか鵠とましろは鳳凰を見て呆れ気味。

「どうしたの？」

カブキが質問するとましろと鵠は鳳凰が争っていた理由を話し始めた。

封印が解かれ、自由になった鳳は凰のような古女房は捨てて新しい妻を探し始め、そこへ偶然通りかかった飛行機を鳳は太魂依だと勘違いし、飛行機に神気を与えて自分をアピールし、神気を使い果たし、ヒヨコの姿になってゆみなの元に。

凰に至っては鳳が落下したのはその飛行機のせいだと思い、敵討と言わんばかりに飛行機を襲っていた。

そして鳳を探し当てた時、既に凰はゆみなの元にてゆみなにデレデレとして必死になって探していた凰はブチキレ、襲い掛かって来たのだ。

「美冬の小説にもこんなのがあったわい。 修羅場というやつじゃ」

「男の人、みんなそーなの？」

「「違う!!」」

ましろの言葉にカブキと、ヨブコと戦っている筈の響鬼とも声が重なり否定。

鳳と凰は未だに争い、そこでゆみなが「もう止めてえ!」と叫ぶ。

「クエ？」

「ずっと一緒だったんでしょ？ 鳳さんには鳳さんが、凰さんには凰さんがいて……大切な家族じゃないんですか？ 出会えたことが、奇跡だから……。仲良くしなきゃ、ダメです」

鳳凰は「クエエ」と鳴き、反省の色を見せる。

＊

その頃、ヨブコと戦っている響鬼、威吹鬼、轟鬼は。

「くそ、こいつ音撃が効かない！」

ヨブコは左肩にあるスピーカー部分から発する音波で鬼の放つ音撃を無効化出来る。

「はああ!!！」

音撃棒を振るうもヨブコは受け止めて響鬼を殴り飛ばす。

「ぐわああ!!!？」

スピーカーを破壊すれば音撃が効くのだが、そんな簡単には破壊させてくれない。

ヨブコの圧倒的強さには装甲になる暇も無く、ヨブコの猛烈な攻撃を喰らいまくった響鬼は吹き飛ばされて変身が解け、変身音叉を落としてしう。

「しまった!」

痛みに耐えて取りに行こうとするもヨブコがヒビキを抑えつける。

「俺達のことを忘れんなあ!!」

威吹鬼と轟鬼がヨブコに攻撃を仕掛けたがヒビキを盾にして威吹鬼と轟鬼の攻撃を止める。

「くそっ!!」

だがその時……。

「おい」

「グウ?」

ヨブコは後ろから誰かに呼びかけられ、ヨブコは殴り飛ばされてヒビキは解放される。

ヒビキを助けたのは1人のいかにも「鍛えてます!」といった感じの男性であり、変身音叉を拾う。

「装甲の力を手に入れても、まだまだ修行が足りないなあ」
「あなたは!」

男性は右手をまわして「シュッ!」とヒビキと同じ癖をすると変身音叉を自分の手の甲に叩き、音を鳴らせて額に当てる。

「はあああ……たあああ!!」

なんと、男性はヒビキが変身する「仮面ライダー響鬼」に変身し、アームドセイバーを取り出す。

「響鬼・装甲」

装甲響鬼になり、さらに両手を交差させる。

「装甲響鬼・紅」

響鬼の身体が真っ赤に燃えあがり、全体的に赤では無かった個所が赤くなって赤一色に染まり、背中にあった音撃棒の他に2本の剣が収まった鞘が背中に装備された姿……「仮面ライダー装甲響鬼・紅」に強化した。

響鬼はヨブコにゆっくり近づいて行き、ヨブコは音撃を無効化させる音波を放つが響鬼は清めの音をアームドセイバーの刃に宿らせ、アームドセイバーをヨブコに振りかざす。

しかし、この響鬼は完全に無効化することが出来ず、アームドセイバーでそのままスピーカーも破壊される。

「イブキイ、後は任せたぜイ」

「はい!!」

威吹鬼は両手、両足に風を纏わせえてヨブコを殴りつけ、その次に

ヨブコを蹴りあげてさらに廻し蹴りを喰らわせる。

「たあああ!!」

「シャアア!!?」

烈管を取りだし、ヨブコに鬼石を撃ちこんで烈管を吹いて清めの音を流しこませ、疾風一閃の3倍の威力を誇る「音撃射・疾風爆裂」を繰り出す。

「音撃射・疾風爆破!!」

「ギシャアアアア!!!!?」

ヨブコは爆発し、響鬼が威吹鬼の肩に手を置いて「お疲れさん」と言葉をかけた。

九之巻 『二頭の鳥』 (後書き)

轟鬼も考えています。

歌舞鬼も、次回辺り一緒に出るかも。

十之卷 『逆襲の龍』（前書き）

後エピソード含めて2話くらいで終わるかも。
アニメの次の話はみんな遊びに行く話だったのでその話は飛ばして。

もう1話も終盤以外介入出来無さそうなので。

十之卷 『逆襲の龍』

あれからましろがいきなり神氣を使い果たした為、ましろは寝込んでしまい、神社の中で布団に寝かせて鶴とカブキが付き添っている。

「しかし、この間に応龍が責めて来たらどうするつもりじゃ？」

鶴の質問にカブキはましろが結界を張っているから大丈夫だと言う。

だが鶴は鋭い目つきでカブキを見る。

「ほう、では応龍では無く手下の人間だったら？」

「えっ？」

カブキは目を見開き、少々戸惑う。

「用人にこしたことは無いぞ」

その頃、泉戸のリビングではヒビキ、イブキ、トドロキが揃っており、客である”元”仮面ライダー響鬼、日高仁志……前回、ヒビキ達を助けた人物であり、既に鬼を引退している。

「その、お久しぶりです！ ヒビキさん！」

ヒビキが日高に頭を下げるが日高は照れ臭そうに「止せ止せ」とヒビキに顔をあげるように言う。

「今じゃ、お前がヒビキだろ？」

「あっ、すいません」

アムイは日高に弟子入りしており、鬼を引退した時に日高から変身音叉を受け取っていたのだ。

「でも、どうしてあそこに？」

イブキの質問に日高は……。

「いや、ヒビキ達の様子見にきたんだけど、まさかヨブコが現れるとはねえ」

「あつ、そうだ。日高さん!! あの装甲響鬼・紅! どうした
らなれるんですか!？」

顔を詰め寄せるヒビキに日高は「分かった、分かったから教える」
とヒビキを落ちつかせる。

「まあ、お前には見せたことなかったけど、もっと鍛えて実はある
な姿見に付けてたのよね」

お茶を飲みながらそう話す日高に、ヒビキは装甲・紅になる為の特
訓に励むことになる。

「それじゃ、まずは太鼓の叩き方からだ!!」

「はい!!」

＊

アメリカは、現在夢の中にいた。

その夢の中ではましろとカブキが楽しそうに話している光景である。

そこに銀髪の男性……人間態の「応龍」が現れる。

「太魂依と人間が上手くやっていると을까？」

「えっ？」

「第一、存在からして違うんだよ。　アリと人間で恋が実ると思うか？」

アメリカが応龍の言葉を聞き「そ、それって！」と言い出すと応龍はニヤリと怪しく笑う。

「お前にもまだチャンスがあるってことだよ」

アメリカの目が見開かれ、そこでアメリカは目を覚ました。

アメリカは窓のカーテンを開けて月を見上げる。

＊

という訳でアメリはなんとかカブキを三四郎の力も借りてデートに誘う事が出来、色々と街を一緒に廻る。

その後、夕方に観覧車に2人で乗ることにする。

一方、ヒビキとイブキはそれぞれ鬼に変身して装甲・紅になる為の特訓の為、威吹鬼と模擬戦を森の中でやっていた。

「威吹鬼・疾風」

「響鬼・紅」

威吹鬼は疾風となり、響鬼は全身が紅くなった「響・紅」になる。

「はあ!!」

響鬼が高く飛び上がり、威吹鬼にパンチを叩きこんで来るが威吹鬼は烈管で受け止め、風を纏わせた足で響鬼を蹴り飛ばす。

「ぐわああ!?!」

音撃棒を手にとった響鬼は素早く威吹鬼に接近し、威吹鬼に音撃棒を振りかざす……と見せかけてしゃがみ込み、威吹鬼の腹部に響鬼はパンチを叩きこんだ。

「ぐふう!?! やるなあ、ヒビキ」

「当然、鍛えてますから!」

響鬼があの癖をやると日高が「おっ！」と声をあげた。

＊

そしてアメリとカブキの乗っている観覧車では……。

「どう？ 気分転換になった？」

「アメリの方が楽しそうにしてた気がするけど」

「私は何時も通りだよ！」

と言いながら笑いあって会話している。

「ね、ねえ、ユウさ。 もう太魂依とかそんなこと忘れちゃってさ
！」

鬼になることいいのか、とツツコミたいが、ましろとの仲をよく思
っていないという意思の方が強かった為、太魂依のことしか頭に入
っていなかったのだ。

「私が封印を解いちゃったから!？」

「それは違う……!」

「ユウが責任感すること無いよ! あの時あたしが遺跡を壊しちや
ったから、そんなのユウの意思じゃない!! 責任なんて感じる必
要無い!!」

しかしカブキは……。

「責任は感じるよ。 綺久羅美様に頼まれた訳だし……」

アメリカは「それが無理あり過ぎる」と怒鳴りあげた。

「私達好きなように生きていいんだよ!? 太魂依とかのことはヒビキさん達とかに頼めば!」

だがカブキは首を横に振る。

「ダメだよ、ヒビキさん達に頼るのは。 あの人達にはあの人達の自由がある」

「じゃあユウはどうなの!? 今、好きなように生きてる!?!」
「だけど、ましろの事もあるし……」

ましろの名前を出された時、数秒アメリカの表情が変わる。

「ユウはさ、ホントにまろまろのこと好きなの? 恋愛って普通はお互いのこと知ったりしてからするんだよ?」

「だけど、ましろはたった1人でこの世界に出て来ちゃったんだ。身寄りも無い、可哀想だろ!?!」

アメリカが「可哀想だから結婚するの!?!」と問われた時、カブキは黙り込んでしまう。

「そんなのって、おかしいよ……。 第一、太魂依と人間の共存ってただユウを利用してるだけかもしれないし!」

「有難う、アメリカは心配して言ってくれてるんだよね?」

カブキの微笑みに、呆氣にとられるアメリ。

だがその時、カブキの胸ポケットが輝き、鶴から貰った猫顔の勾玉みたいなものが緑に輝き出した。

『念の為に持っておれ、身近な者にもなにかあれば反応するからの』
鶴にそう言われて渡されていた勾玉。

「もう、あたしの言う事なんて全然聞いてくれないんだから！」

プイツとするアメリだが、カブキは「そんなことないよ」と声をかける。

「だけど、まずはそいつの話を聞かないと！」

「えっ？」

勾玉をアメリにかざすと突然姿を消していた応龍がアメリの隣の席に座った状態で現れる。

「久しぶりだなあ、やちまた。 いや、今は泉戸裕理、それとも仮

面ライダー歌舞鬼か？」

「アメリから離れろ！！！」

カブキが応龍に殴りかかったが、応龍は神通力でカブキを観覧車の窓ガラスから下に落としてしまう。

「うわああ！！？」

「ユウ！！！」

この高さから落ちれば一たまりも無い、カブキは変身音叉を取りだし、額に当てる。

「はあああ……たああ!!」

「仮面ライダー歌舞鬼」に変身したカブキは着地し、観覧車から気絶したアメリを抱えて応龍が飛び降りる。

「流石は仮面ライダーか、あの高さから落ちて無事とはなあ」

応龍は神通力で突風を歌舞鬼に放つが、歌舞鬼は腕を交差して耐え抜く。

「お前の神通力は通じない」

そこに……。

「裕理さん!!」

元の姿に戻ったましろと、ヒビキ、トドロキが駆けつける。

「修行完了、装甲・紅、きっちり身につけた!」

イブキは先程の模擬戦で疲れていて来れない。

その分ヒビキがあんなに動いたのに元気なのは一体どういうことなのだろうか?

それぞれの変身アイテムを取りだし、「仮面ライダー響鬼」「仮面

ライダー轟鬼」に変身する2人。

「ましろ、もう大丈夫なの？」

「はい！ もうすっかり！」

上から歌舞鬼とましろが喋る。

「イチヤついてんじゃねーぞ！！ それじゃ、本番と行こうか！！」

応龍が叫ぶと辺り一帯が紫の空に変わり、普通の人間の時間が止まって目から色を無くしたアメリの背中に黒い翼が生え、応龍は真の姿へと変わる。

「なるべく人がいない所に誘導するんだ！！」

轟鬼の言葉に従い、応龍の攻撃を避け、それで周りになるべく被害を与えない様に人気の無い場所へと応龍を誘い込む響鬼達。

「俺も新しい姿を試すかな。 轟鬼・雷帝」

轟鬼がそんなことを言い、両腕を交差すると身体中に電撃が走って行き、轟鬼の姿が変わり、全体的に黄色くなった「轟鬼・雷帝」へと変わる。

「はああ！！ おいアメリ！！ さっさとそんな蛇野郎から抜け出しちまえ！！ お前はこんなことする奴か？ 違うだろ！！」

「そうだよ、目を覚ませ、アメリ！！」

轟鬼と歌舞鬼が呼びかけるが、アメリに反応は無い。

「恐らく、応龍を倒せばどうにかなる筈です!! それにしても、こんな街中で戦闘なんて……」

「別に構う必要はねえだろ!!」

応龍は炎を響鬼達に放ってくるがましろは札でバリアを張り、ましろを飛び越えて歌舞鬼が音叉剣で応龍に斬りかかり、轟鬼は電撃を纏わせた拳を前に突き出し、雷の弾丸を応龍に放つ。

「こんなものが効くかあ!!」

「チッ」

轟鬼は舌打ちする。

「おのれの為にアメリカさんの心につけ入こむなんて!」

「テメーが言えた義理か綺久羅美!!」

ましろは札を飛ばして応龍の動きを止めようとするも、応龍には効かず、応龍は炎を吐きだすがましろは札で防ぐ。

「防ぎきれません……!!」

ここは避けるしかないと判断したましろは高く飛行して攻撃を避け、響鬼の放った音撃棒の炎を応龍に放つ。

大してダメージは与えられないが、応龍にとっては目障りだった。

「目障りなんだよ!! 鬼ども!!」

炎を響鬼に放つが、響鬼はアームドセイバーを取りだし装甲響鬼に変わった後両腕を交差させる。

「装甲響鬼・紅」

装甲響鬼にさらに真紅の色が重なった「仮面ライダー装甲響鬼・紅」へと変わる響鬼。

響鬼は応龍の放った炎の直撃を受けたが、ダメージを受ける訳でも弾く訳でも無く、その炎を吸収して力に変換してしまった。

「ましろ！ 神気と清めの音の力を合わせるから俺に力を貸して！」

「はい！！」

轟鬼は高く飛び上がり、歌舞鬼はましろから神気を分け与えられ音撃鼓を外して目の前で音撃鼓を巨大化させる。

「音撃打・神通爆裂の型！！」

「音撃斬！！ 雷撃一閃！！」

烈翠で音撃鼓を叩いて清めの音と神気を合わせた衝撃波を応龍に放つ歌舞鬼と、清めの音と電撃を纏わせた烈雷で応龍を斬りつける轟鬼。

「ぬおおおお！！！！？」

響鬼はアームドセイバーに口元を近づける。

「鬼神超覚醒！！ ハア！！」

アームドセイバーから「鬼神超覚醒」という巨大な文字が飛び上が

り、それが応龍にぶつかると思龍の身体は輝き、元の空間へと戻り、アメリカも元に戻って行く。

「ぐわああああ！！！！？」

＊

「ワシのおかげでこれだけの騒ぎで済んだわのお」

泉戸家では鵜が被害を最小限に抑えられたのは自分のおかげだと天狗になり気味だった。

「私が眠っていなければこんなことにはなりませんでした！」

とましろが反論。

「別にあなたの力なんて必要ありません！」

ムスツとした表情のましろ。

「そうかそうか、それじゃワシはもうなにも手伝わん」

「手伝ってと頼んだ覚えはありません！」

鵜とましろは口喧嘩をしており、それをイブキとトドロキは見て「相変わらずだな」と笑っていたとか。

ましろはカブキの様子が気になったが、先程ヒビキがカブキのいるバイクなどを修理する場所に向かった為、ここはヒビキに任せた方がいいのかもしれないと思い、ましろはカブキの元にいなかった。その後、カブキは鶴の予想が的中してしかも、手下の人間がアメリカだったことに落ち込んでいた。

「少年」

そこにヒビキが入ってくる。

「アメリカちゃんのこと考えてるの？」

「はい……」

「きつと大丈夫さ。いざとなったら、少年かましろちゃんが彼女を助ければいい」

ヒビキの言葉にカブキは「えっ？」となる。

「それは多分、きつと少年とましろちゃんにしか出来ないことだからさ」

それだけ言うとヒビキはそこから去って行った。

十一之巻 『レジェンドライダー』

あれからアメリカには変わった様子は無く、アメリカの誘いで遊びに行ったゆみな、ましろ、三九郎、カブキ、鶴。

だがそれ以来、アメリカの様子がおかしくなっていた。

しばらく学校には行かず、カブキとましろが心配でお見舞いに來たのだが、カブキがましろと一緒にいることが気に入らなかったらしくアメリカは怒ってカブキもそれに怒り、ましろとカブキはそのまま家へと帰った。

さらにはましろの体調も少し崩れて彼女は寝込んでしまっている。

そして、まだ減びていなかった応龍はアメリカの心に潰け込んだ。

「アンタなんて、絶対にまたユウが倒してくれる!!」

「じゃあなんでやちまたを呼ばないんだ？」

応龍の台詞に、アメリカは言葉を返せなかった。

「ケータイとかいうの使えば1発だろが。神気がねえテメー等でも仕える。なのに、なんでそれをしねえんだ？」

アメリカと応龍は応龍の創り出した幻影の観覧車の中におり、応龍とアメリカは向かい合っている。

「アンタ達が出て来なければ!!」

「それ綺久羅美にも言っておくれよ」

「えっ？」

「共存共存とか抜かしてる綺久羅美は人間の都合なんぞ考えやしねえ。今さら友達になりましようってそうはいくかよ。なんとかする方法はただ1つ、お前がやちまたを助けてやればいいのさ」

応龍のその言葉に、目を見開くアメリ。

「私が……？」

「へっ！」

そして元の現実の空間へと戻り、その場が輝きアメリの神気を使い応龍は元の姿に戻るが、その姿は以前よりも巨大な姿だった。

関東の太魂依達の神気をも吸い取り、かなりのパワーアップを果たしている様だ。

＊

その頃、カブキ達が通っている学校では……。

三九郎がカブキを殴っていた。

三九郎はアメリのお見舞いにカブキだけで行けと言ったのにましろを連れていったことに三九郎は激怒したのだ。

「このドアホ！！　ここまでニブチンやったとは思わへんかったで！！」

「なにすんだよ！？　俺はただ、2人に仲直りして貰おうと……」

「それでましろちゃんもアメリカもどっちも傷付いてもか！！？」

「ッ！！」

三九郎の言葉に、カブキは言葉を失う。

だがその時、空が紫に変わり、これは応龍が学校に現れた時と同じ現象が現れたのだ。

フロールレスに行き、まだ動ける人間がそこに集まる。

動けるのはゆみなに美冬、鶴、ましろ、ヒビキ、カブキ、イブキ、トドロキ、鳳と凰である。

鶴からアメリカの神気を使って応龍が暴れ始めようとしたのを知らせる一同。

「アメリカがな、あの子精神的に弱い子だから……」

「うん。　ウチの母さんもそうだから……」

上からトドロキとヒビキが喋り、このどうにかする方法は1つ、応龍を倒すことである。

「ゆ、ゆみなもアメリカお姉様を助け出す為に戦います！！」

とバットを持ったゆみな。

「ゆみなちゃん、大丈夫。君はここにいてくれ。アメリカは俺達が助け出す!」

イブキに言われ、トドロキは美冬に此処にいるように言い出す。

「今度の敵は結構手強いからな」

「なにを言う!? だからこそ微力ながら手伝おうと!」

しかし、鵜に美冬は止められてしまう。

「今のお前では足手まといにしかならんからな」

鵜が少しキツメに言い、今回美冬はあっさりと退いた。

「分かった、お前が言うなら……」

その後、鳳と凰の背中に乗り、カブキ、ましろ、ヒビキ、トドロキ、イブキは応龍のいる東京タワーへと向かった。

「なあ、鵜、ホントによかったのか? 美冬さん、悲しそうだったぞ?」

「ホント、鈍いのに程があるよね、カブキ」

ヒビキに苦笑いしながらそんなことを呟かれるカブキ。

「つく……ひつく」

鵜からなにやら鳴き声のようなものが聞こえる。

「お前、泣いてるのか?」

「泣いてなどおらん!!」

「きっと、美冬さんも分かってくれてるよ」

東京タワーへと到着し、上の怪の外に降り立つ一同。

「来やがったか、やちまたに綺久羅美共!!」

早くしなければアメリの神気を吸い取られて大変なことになる。

「アメリを返せ!!」

「はん」

応龍は黒い翼が生えたアメリを空中に出現させるが、ヒビキ達が呼びかけてもなんの反応も無い。

「まさかアメリさんの心を!?!」

「どの道こいつがお前等の元に帰るとも思えないがな!!」

応龍は首からヒビキ達に突っ込んで来るが、素早くヒビキ達は「仮面ライダー装甲響鬼」「仮面ライダー威吹鬼・疾風」「仮面ライダー轟鬼・雷帝」「仮面ライダー歌舞鬼」に変身し、一斉に応龍を迎え討つ。

「たあ!!」

響鬼が応龍の頭に飛び乗り、音撃棒で応龍の頭を叩きまくる。

「鬱陶しい!!」

「おわああ!!?!? お前はそんなに人間が憎いか!!?!?」

「ああ、憎いね!!」

今度こそ頭から突っ込んできてその先にいた威吹鬼と轟鬼と歌舞鬼、威吹鬼と轟鬼は避けたが歌舞鬼は避け切れずに足元が崩れてその下に落ちてしまう。

「おわああ!!?」

「「カブキ!!」」

「裕理さん!!」

ましろは札を応龍に投げつけたが、全くのノーダメージ。

「ヒビキさん、イブキさん、トドロキさん。裕理さんに伝えてください……。アメリカさんを連れて戻るって」

「ましろ! 何する気だよ!」

轟鬼が止めようとするもましろは白い獣の姿となり、応龍の放つ光弾などを避けて応龍の中へと入って行った。

「あいつの元に行ったか……」

「キエエエ!!!」

続いて真の姿に戻った鳳凰も攻撃を加えるが、応龍は鳳をエネルギーの鞭で捕え、鳳を助けようとする凰は応龍に隙を突かれて噛みつかれる。

「鬱陶しいんだよ!!!」

「「キエエエエ!!!?」」

そのまま鳳凰を吸収し、力に変換されてしまった。

「鳳！！　凰！！　こうなれば……」

「クソ！！　まだかましろちゃん……」

響鬼はましろの帰りを待っており、出来るだけ時間を稼ぐようにしている。

鵜があのスライムのような姿に戻り、応龍を睨みつける。

「勝てない戦いをしないのがお前のポリシーだったんじゃないのか？」

応龍の質問に確かにそうだと答える鵜。

「じゃが、今は大切はものがたくさんできた。　ワシはそれを守りたい……だから！！」

鵜が飛び上がり、触手のようなものを応龍に放つ。

しかし、それら全て応龍の腕に掴まれる。

「くそー！！」

「音撃斬！！　雷電一閃！！」

そこに轟鬼の放った烈雷での一撃で腕を斬りつけられる応龍だが、なんとも無いようだった。

「そんなッ！！？」

「すまん、やちまた、白い獣……、鬼ども」

2人と響鬼達に謝罪をした後、鵜は応龍に吸収された。

「鵠!!」

一方、先程の一撃で少しの間気を失っていた歌舞鬼は誰かによって起こされた。

「んっ? 俺は……」

「目が覚めたか」

歌舞鬼は自分を起こした人物を見て驚く。

「あ、あなたは!!」

その人物は黒い身体にバッタを思わせる仮面の戦士……。

そして外では、応龍の放った炎をどうにかアームドセイバーで切裂く響鬼。

威吹鬼は烈管から疾風の状態で仕えるモード、「疾風モード」にして風の弾丸を応龍に打ちこむが、全く効いておらず、轟鬼は接近する前に応龍の腕で弾かれてしまう。

「ぐわああ!!!?」

「トドロキ!!」

倒れこんだ轟鬼に駆け寄る響鬼と威吹鬼。

「化け物だろ、こいつ」

「こんなの勝てるのかね」

かなりのパワーアップを果たした応龍に、かなり苦戦していた響鬼達。

上から威吹鬼と轟鬼が咄くと突然「諦めるな!」という言葉が聞こえ、どこからかバツタをモチーフとした赤いマフラーに銀色のブーツと手袋の仮面ライダーと、もう1人はそのライダーと殆ど同じ姿だが手袋とブーツの色が赤の仮面ライダー、赤い仮面にトンボを思わせる仮面ライダー、カブト虫を思わせ胸に「S」と書かれた仮面ライダー、アリの思わせる銀色の仮面ライダーが現れ、そこに歌舞鬼と先程の仮面ライダーが駆けつける。

「心配かけました、ましろは? まさか……!」

「安心してカブキ、取り込まれたんじゃ無くてましろちゃんはアメリカちゃんを助けに行っただけだから」

響鬼のその言葉を聞き、安心する歌舞鬼。

「まだ安心するのは早い」

トンボのライダーが歌舞鬼に言い、歌舞鬼は頷く。

「鬼達が太魂依と昔からの交流があってよかったよ。そのおかげでトウキに鬼術でこの空間でも動けるのだからな」

銀色のブーツと手袋のライダーが喋り、応龍はライダー達を睨みつける。

「なんだテメー等!?!?」

現れたライダー達は応龍に振り返る。

「俺は仮面ライダー……1号!!」

「仮面ライダー2号!!」

「仮面ライダー……V3あ!!」

「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ……悪を倒せと俺を呼ぶ、俺は仮面ライダーストロンガーアアア!!」

「仮面ライダースーパー1!!」

「俺は太陽の子!! 仮面ライダーブラック!! RX!!」

仮面ライダー1号、2号、V3、ストロンガー、スーパー1、RX、伝説のライダー達が集結した。

十一之巻 『レジェンドライダー』（後書き）

なぜこのライダー達なのかというと、他のはまだ見て無いからです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7146x/>

仮面ライダー響鬼×タユタマ 戦鬼と太転依

2011年12月17日18時56分発行